

# Two Different Approaches to the Social Theory of Talcott Parsons : J. C. Alexander and C. Camic

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/936">http://hdl.handle.net/2297/936</a>

## パーソンズ研究における二つのスタイル

— J.C.アレグザンダとC.カミック —

溝 部 明 男

Two Different Approaches to the Social Theory of Talcott Parsons:  
J. C. Alexander and C. Camic

Akio MIZOBE

- はじめに
- |   |  |
|---|--|
| 1 アレグザンダのパーソンズ論                                 | 2. 3 基本図式としての二分法 — 遺伝・環境 vs. 規範的要素 —   |
| 1. 1 理論のもつ曖昧さについて                               | 2. 4 二分法と行為図式および主意主義的行為者観              |
| 1. 2 理論のレベルを明確に区別するという方法                        | 2. 5 二分法と秩序問題                          |
| 1. 3 アレグザンダのパーソンズ像                              | 2. 6 概念図式と事実に関する方法論 — 分析的リアリズム —       |
| 1. 4 パーソンズ研究の第三世代                               | 2. 7 中間的セクター・三つの創発特性・究極的価値 — 社会学のニッチ — |
| 2 カミックの初期パーソンズ論                                 | 2. 8 収斂テーゼ — つくられた社会学理論の歴史 —           |
| 2. 1 社会的知的コンテクスト分析という方法                         | 2. 9 カミックの初期パーソンズ像 — コスモポリタン・ローカリズム —  |
| 2. 2 生物諸科学・行動主義・経済学と社会学 — 社会学のチャーターを作成するという目的 — | 3 二つの研究スタイルの特徴                         |

### はじめに

本稿の目的は、C.カミックの初期パーソンズ論の一端を紹介し、彼の所説について若干の検討を行うことである。カミックの社会学史の方法とそこから生み出される一つ一つの見解は、かなりユニークであり、これまでにあまり見られなかったタイプのものであると思われる。カミックの考え方について、日本では散発的な言及はすでにくつがあるが、ある程度まとまった紹介と検討は未だ十分になされているとはいいがたい。そこで本稿では、カミックの論考のうちから、とくに初期パーソンズに焦点をあてた論文をとりあげたい。

カミックの初期パーソンズ論をとりあげる理由は以下の通りである。まず、カミックはその一連の仕事の中で、初期パーソンズ論の一つの焦点をあてているからである。カミックは、1979年の論文から1992年の論文に至るまでの中で、1930年代のパーソンズがハーヴァード大学において、それまでのアメリカ社会学の流れを集大成しながら、またまわり

の知的サークルの影響をとり入れつつ、どのようにして社会学の制度的な確立を図ろうとしたのか、また、その時、どのようなゆがみが社会学の制度化の発端に組みこまれたのか、という問題を、彼独自の「社会的知的コンテキスト」(sociointellectual context)の分析という方法によって明らかにしようとしている。

パーソンズ研究は現在、第三世代の手に移りつつ、「パーソンズ・ルネッサンス」(高城2000:50)「パーソンズ・リヴァイバル」(Camic 1987:421)を迎えているといわれる。パーソンズ研究の蓄積はかなり厚くなっているといつてよい。そのような先行研究の蓄積の厚い文脈においてみれば、カミクの初期パーソンズ論およびその基礎をなす彼の方法の独自性がいっそう明らかになるだろうと考えられるからである。

その意味で、迂回するようではあるが、まず、J.C.アレグザンダ<sup>1)</sup>のパーソンズ論の概観を試みる。もちろんこの小稿では、アレグザンダのパーソンズ論の特徴のいくつかを限定的に紹介するのみにとどまらざるをえない。文献は主にアレグザンダ(1983)にしぼる。アレグザンダのパーソンズ論に立寄るのは、これまでのパーソンズ研究の一つの典型的な代表例と思われることと、アレグザンダ(ハーヴァード大学出身。カリフォルニア大学バークレー校にて博士号取得)(アレクサンダー 1996:193)とカミク(ピッツバーグ大学出身。シカゴ大学にて博士号取得)の組み合わせはある意味で(ハーヴァード学派とシカゴ学派)、対極的な関係に立っているように思われるからである。

アレグザンダとカミクのパーソンズ論を、限られたスペースの中で広汎に比較対照することは困難なので、ここでは、ときとして難解と評されることもあるパーソンズの著作を読みとくために、両者はどのような工夫をしているか、その結果どのようなパーソンズ像を提出しているか、というやや一般的な問題を比較のための焦点として設定しておきたい。(両者の対象とするパーソンズの活動時期は同じではないが、初期パーソンズに関していえば、「分析的リアリズム」などの方法論また「社会学の定義」などについての両者の見解に留意することにする。)

## 1 アレグザンダのパーソンズ論

### 1. 1 理論のもつ曖昧さについて

J.C.アレグザンダ(Jeffrey C. Alexander)は、「すぐれた諸理論は、根本的に曖昧さを伴う」(Alexander 1983:278)という基本的発想に基づき、「パーソンズの理論、またその他の古典的著作の理論も、内的一貫性が格別に高いものとみなしてかかるのは誤りである」(Alexander 1990:341)と述べている。このような基本的発想に立ちながらも、アレグザンダは、ある理論の中の曖昧さや論理的矛盾を発見し、そのことだけによって、

その理論全体の性格なり、その理論への評価を定めてしまうという短絡的な方法をとらない。むしろ、研究対象とする社会学理論の内容のもつ複雑性を認め、ときには相互に矛盾するかもしれない多様性を基礎にして一つの理論が構成されている可能性をも認めた上で、その研究対象を扱っている。

アレグザンダによると、パーソンズは、多面的な側面をあわせもちながら仕事をしたという。たとえば、「分析的に洗練された理論家」の側面、「非経験的な理論的諸前提」に導かれたという側面、そして「パーソンズの思想を形成する上で、(一定の役割を果たした一引用者) もっとも高度に一般化された諸前提」をもつという側面などである (Alexander 1983 : 300)。そして、「パーソンズ理論が全体としてもつ複雑性 (complexity) は、一つあるいは二つのレベル (あるいは側面 — 引用者) の影響に還元できるものではない」 (Alexander 1983 : 295/300) ので、パーソンズ理論を安易な還元主義によって要約することを慎むように主張し、むしろ、その多面性こそがパーソンズ理論の豊かさである、と認識している。

「パーソンズ理論は複雑な内容構成をもっているのに、全体を見ないで部分のみをとり出し、それをもってパーソンズの理論全体と等置してしまう人々がいる。科学的議論の豊かな複雑性 — その複雑性はパーソンズの場合、とくに並みはずれており、意味あるものである — をこのように過度に単純化することによって、パーソンズの思考をしばしば荒っぽいやり方で歪めてしまう批判者たちがいる」 (Alexander 1983 : 292)。

このようなアレグザンダの懐の深い見解に接すると、断続的ではあるがいささかなりともパーソンズ理論に関心をもち続けてきた筆者などは、なるほど、という一種の感懐を禁じえない。(以下のことは一つのたとえであるが)「パーソンズ理論に曖昧さや矛盾点はかなりある。それは当然のことであり、だからといって、それでパーソンズ理論の値打ちが下がるわけでもない」と明確に考えることは、筆者などには長い間できなかった。むしろ、「パーソンズ理論には一見したところ、これこれの矛盾点や曖昧なところがあるが、このように再構成してみたら、それらの困難はある程度解消されて、もっと首尾一貫した論理構成になるのではないか」という発想を前面に押し出そうとしていたような気がする。

同時にまた、部分を取り出したり、部分を拡大したりして、パーソンズ理論の性格をきめつける研究方法をもアレグザンダは批判している。筆者にとってはこれもいくらか耳の痛い話である。省みて、パーソンズ理論の中たとえば二つの対立する (と解釈できるような) 傾向があるとすると、どちらか一つを強調して、他の傾向の比重を軽目に見積るような解釈を行ったという覚えがないでもないからである (それほどきつい還元主義的な解釈を行ったことはないが一応の弁明はしておきたい)。

パーソンズの曖昧さの一例をあげておきたい。「分析的リアリズム」<sup>2)</sup>は、パーソンズの生涯を通じて基礎となった方法論であると思われる。初期の代表的著作である『社会的行為

の構造』(原著1937年、以下では『構造』またはSSAと略称する)においては、第1章からすでに、「分析的要素」という用語とともに分析的思考法が用いられており、それに基づいて、論述が進められている。有名な単位行為の準拠枠も「分析的リアリズム」(この用語自体はそこでは明示されていない)に基づいた図式である。たとえば、状況は(行為者の観点を通して)「条件」と「手段」にわけられているが、これは分析的な意味での区別であり、具体性を保持した類型的な意味での区別ではない。読み進めていくうちに、分析的リアリズムという方法によって、単位行為の準拠枠が設定されるのは、一つには、行為者が、遺伝や環境によって完全には規定されない自由を保持している——主意主義的行為理論の主張の一部——ことを表現するためであるらしい、ということがおぼろげながらわかってくる。そして、そのことは、「実証主義的要素」と「理念主義的要素」を弁別した上で、それら両者が主意主義という枠の内に収斂するという主張につながってゆく……、ということなどもわかってくる。

それにもかかわらず、「分析的リアリズム」という名称が初めて明示され、その内容がまとまった形で説明されるのは、SSAの最終章第19章なのである。多くの読者は、最終章を読み「分析的リアリズム」を理解してはじめて、SSAのはじめの数章もわかっていくというプロセスをたどるのではないだろうか。読者にとってはわかりにくい構成である。このような章構成が『構造』の難解さの原因の一つになっているのはたしかである。「分析的リアリズム」のまとまった説明がなぜ最終章におかれているのか、もっと前の方の章におけば、わかりやすいと思われるのに、そうしなかったのはなぜだろうか。

『構造』の最終章では、(究極的目的の手前に位置すると考えられる)目的-手段の連鎖からなる中間的セクターにおける三つの創発的特性の分析的区別、社会諸科学の位置づけ、社会学の定義も扱われている。その際に「分析的リアリズム」が基礎的方法として用いられているので、結局のところ、共通価値と統合に照準する社会学の定義のために、「分析的リアリズム」が用意されたのか、という解釈もありうるだろう。しかし、周知のとおり、初期パーソンズの社会学の定義は、統合論的偏向を指摘されて、きわめて評判がわるい。他方、「分析的リアリズム」は、中期パーソンズ以後においても、たとえば、デュルケムの社会的事実の外在性というテーゼと、「個人主義」が社会的な価値であるという主張とを、価値の内面化論によって、論理的に一貫させたときにも(Alexander 1983: 87-88/122-123/127-128)、またウェーバーの「官僚制の鉄の檻」テーゼに対して、「合議制的アソシエーション」の存在を指摘して、ウェーバーの過度のペシミズムを緩和したときにも(溝部 1986)、基礎的な方法として大いに活躍している。また、後期パーソンズにおけるAGIL図式(アレグザンダは「インターチェンジ・モデル」と呼んでいる[Alexander 1983: ch.4])も、基本的には、「分析的リアリズム」に基づく抽象的分析の産物であると考えられる。

このように概観すると、「分析的リアリズム」が、パーソンズの初期・中期・後期を通じて、八面六臂の活躍をしているのに対して、「統合」に焦点を置く社会学の定義の方は客観的にみて、それほど重要性が高いとはいえないであろう。したがって、「分析的リアリズム」と「社会学の定義」を結びつける解釈は、それほど有力なものとは思えないのである。

では、「分析的リアリズム」は何をきっかけにして発想されたのであろうか<sup>3)</sup>。また、それを『構造』の冒頭部でわかりやすく説明せずに、最終章で名称を明らかにし、かつ、まとめて説明したのはなぜなのか。これらの疑問に対する答えは、パーソンズの公刊された著作の中に見出すことはできない。「分析的リアリズム」は、ホワイトヘッドなどの科学哲学者の影響の産物という見解もあるかもしれない。しかし『構造』中では、「具体者置き違いの誤謬」という概念の引用注に、ホワイトヘッドの名前が記されているが、「分析的リアリズム」という概念には、引用注は何もつけられていない。「具体者置き違いの誤謬」という考え方と、「分析的リアリズム」は、後者のコロラリーの一つが前者である、といえるほど近い関係にあるが、「分析的リアリズム」という用語自体は、ホワイトヘッドからの引用ではないようだ。すると、「分析的リアリズム」という考え方は、どこからどこまでがパーソンズのオリジナルであるのか、それともオリジナルではないのか、曖昧な点があるといわざるをえない。もしオリジナルなところが多いのであれば、『構造』中で、現行のように最終章に置かずに、冒頭付近で強制的に説明した方が、難解な書物という無用な印象を読者に与えずにすんだのではないだろうか。

このような問題も、アレグザンダのいう「アンビギュイティ」の一例といえるのではないだろうか。

「主意主義」のもつ曖昧さも例にあげておこう（この例は、アレグザンダが戒める「還元主義」の問題にも関連する）。

同じく『構造』で論じられる主意主義的行為論の中には、性格を異にする二つの人間観が含まれており、結局のところ、どちらがパーソンズの真意なのか、というよく知られた問題がある。一つは、パーソンズの1935年論文や、『構造』第2章の単位行為の準拠枠に関する説明の中で強調されたもので、「人間は能動的、創造的で評価する主体である」という考え方である。もう一つは、『構造』第3章の「ホブズと秩序問題」の中で、また第19章で強調される、規範的要素によって人間行為はコントロールされているという考え方である。

研究者の中には、前者にこだわる人もいれば、後者の比重を重くみて、前者を軽く扱う人もいる（筆者はどちらかといえば後者のグループに属してきた）。

しかし、アレグザンダによれば、二つの論点をあわせて抱え込むパーソンズこそが理論的に豊かな源泉であり、どちらか一方のみをとり出すことは、実り少ない「還元主義」であるとして退けられる。

アレグザンダによると、パーソンズ中期の「社会化論」によって、この二つの考え方は無理なく接合された。パーソンズのいう人間の「自由」とは、「社会化」によって可能となり、またその範囲内の自由であるということである (Alexander 1983 : 120/123-129)<sup>4)</sup>。

## 1. 2 理論のレベルを明確に区別するという方法

さて、このようにパーソンズ理論の「曖昧さ」を積極的に認めてパーソンズを読みといていくアレグザンダの基本的方法はどのようなものであろうか。まず、理論という言葉でふつうひとくくりにされる言明の総体を、彼は複数のレベルにわけ、そのレベルの独自性・自律性を尊重することに徹する。あるレベルの問題を他のレベルに還元して、実質的に元のレベルの問題を無視したり、あるレベルで論じられるべき問題を、別のレベルに置きかえて問題を論じたり (レベルの混同)、ある時はこちらのレベルを、次には別のレベルを論じながら、同じレベルの問題を扱っているように議論することを避けるように強く主張する<sup>5)</sup>。

彼が依拠する理論のレベル分けは、たとえば、彼の1983年の著作の序文の中に、図1 (そのタイトルは「科学的連続体とその諸要素」である) として示されている (Alexander 1983 : xviii)。その図1では、より形而上学的性格の強いものから、より経験的な性格をもつものまで、10のレベルが区別されている。この図1は引用するには詳しすぎるので、ここではもう少し簡略化されたものを引用しておこう。

- ① 理論前提 (presuppositions) (例、社会学的認識論。実証主義か理念主義かなど。)
- ② イデオロギー的指向
- ③ 方法論的前提 (例、帰納か演繹かなど。)
- ④ 命題の諸要素 (propositional elements) (例、経験的観察を要約するもの。)

(Alexander 1983 : 278)<sup>6)</sup>

理論のレベルをきちんと区別し、レベル間の混同や還元を明確にただすというアレグザンダの方法は、相当に徹底されている。彼の著作『社会学における理論的ロジック』(以下、『ロジック』と略称) 第4巻 (『古典思想の現代的再構成 — タルコット・パーソンズ —』) は10章構成で書かれているが、そのうち6・7章がこのレベル間の混乱を指摘する作業にあてられており、8・9章が「理論前提」(あるいはメタ理論 — 引用者) レベル内の混乱を批判する作業に当てられている。対象は、パーソンズ研究者の著作にとどまらず、パーソンズ自身の著作も区別なく批判されている<sup>7)</sup>。

## 1. 3 アレグザンダのパーソンズ像

上のような基本的方法に基づいて、アレグザンダが提出するパーソンズ像はどのようなものであろうか。きわめて要約的にまとめることが許されるとすれば、次のようなものになろう。

#### (1) 古典的巨匠との対話

パーソンズは、古典的な社会学の理論家たちと常に丁寧な対話を続けながら、仕事をした。その成果として、デュルケムとフロイトの接合による社会化論、またウェーバーの官僚制論に対置されるパーソンズ独自の合議制的アソシエーション論が生まれた。この二つによって、デュルケムやウェーバーが直面していた理論的困難が解決された。

#### (2) 多次元的思考

パーソンズが理論家として、生来備えていたともいえるべき特質は、社会的世界（あるいはそれを記述する準拠枠内）における多次元性（multidimensionality）に対して、彼が豊かな感受性を持っていたことである。この多次元性とは、たとえば、「理論前提」の意味における、個人主義と集合主義、規範主義的な見方と道具主義的な見方、理念主義と実証主義などの組合せにおいて、パーソンズは各々の組合せの一方の極（あるいは次元）に片寄ることなく、両方の次元を視野に入れて思考したという意味である。また、理論モデルのレベルにおける、制度（派）的アプローチと機能主義的アプローチなども、彼の多次元的思考の一部を形成した。

このような多次元性が最終的に表現されたものの一つが、四つの次元からなるインターチェンジ・モデルである。

#### (3) パーソンズ自身の混乱・誤謬の指摘

しかし、パーソンズ自身にも、方法論的な誤謬や「理論前提」における誤りが散見され、パーソンズの著作を研究する場合、研究者はそのような誤謬を明確に指摘することが重要である。これはパーソンズ研究者の著作に見られる混乱についても同様である。とくにインターチェンジ・モデルの四つの次元を、経験的あるいは論理的に根拠づけるパーソンズの試みは成功していない。したがって、そのモデルを使用する場合、ユーザー側にも注意が必要である。

#### (4) 「多次元性」の感覚の源泉

アレグザンダによれば、パーソンズの多次元性への鋭い感覚の源をたどると、キリスト教の伝統にいきつくという。パーソンズは生涯、自身の内なるキリスト教的遺産と議論を続け、それが形をとったものが、多次元性の強調である、という解釈も可能である (Alexander 1983 : 131)。

やや長くなるが当該の箇所を引用しておく。「パーソンズはこのような細心の注意を要するコース——個人主義と集合主義の間、合理主義的モラルティと規範主義的モラルティ間のコース——を彼のキャリアのごく初期の頃からしっかりと歩んできた。ある意味では、

このたたかいは、パーソンズとキリスト教遺産の生涯にわたる議論が形をとってあらわれたものでもあった。パーソンズの家族のルーツは、アメリカ中西部で展開された社会福音運動にある。この運動は、初期の産業主義の弊害にアメリカが直面したとき、建国期アメリカ・プロテスタンティズムのもっていた個人主義と私生活中心主義を否定し、代わりに、政治的活動主義と改革を強調する立場にくみしていた。パーソンズの第一著作『構造』の中に、この遺産の影響をみてとることも可能である。パーソンズはその著作の中で、功利主義者たちによる主意主義的強調を受容しているが、しかし他方で、その主意主義の含意を個人主義的かつ合理主義的に理解する功利主義者たちの考え方を拒否している。さらに、功利主義におけるこれらの退けるべき諸要素のルーツは宗教改革にまで遡れると彼は考えた。また、これらのネガティブな諸要素をとりのぞくことは、行為に『宗教的な』要素を付加することによってのみ可能であると彼は論じた」(Alexander 1983 : 131)<sup>8)</sup>。

#### (5) 目標としての真の総合

パーソンズ理論の目指したものは、互いにたたかいあう理論的諸立場の分立を克服して、真の総合 (synthesis) を打ち立てることであった。アレグザンダによれば、パーソンズは世界教会主義 (ecumenicism) にも匹敵する、諸学派の統一を目指していたという (Alexander 1983 : 45/152)<sup>9)</sup>。

第2章で紹介するカミックによるパーソンズ解釈の一つは、一般にパーソンズの依拠する二分法があるとすれば、どちらか一方の極を全く排除して、他の極を採用するというものではないが、しかし実質的にはどちらか一方の極に肩入れしている、というものである。それに対して、総合を強調するのがアレグザンダの解釈である。顕著な相違である。

#### (6) 『社会的行為の構造』について

アレグザンダ自身は、初期から後期に至るまでのパーソンズの全活動期間を視野に入れており、とくに初期に重点を置くというスタイルはとっていない。しかし第2章で扱うカミックの議論は、初期パーソンズにしばられているために、それとの関連で、ごく大づかみに『構造』に関するアレグザンダの見解を記しておきたい。

アレグザンダによれば、パーソンズの多次元的思考が形成されるのは、上述のキリスト教的遺産のほかに、古典的社会理論および社会思想家とのたえざる対話によってであり、そういうプロセスの中で、とくに「理論前提」やメタ方法論レベルの問題をまとめるために、『構造』が着手され、初期パーソンズの社会学が集大成されたという (Alexander 1983 : 44)。

「分析的リアリズム」がどのように案出されたかという問題については、アレグザンダは、後述するカミックの説 (新古典派の方法を導入したものという説) を批判する文章の中で次のように示唆している。パーソンズは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を英訳する作業を通して、ウェーバーの影響を受けたこと、ホワイトヘッドやヘ

ンダーソンの科学哲学の影響を受けたこと、それらの結果が「分析的リアリズム」に結実したのではないか、という書き方をしている (Alexander 1990 : 340, 1983 : 325 n.38)。

筆者の言葉でいいかえれば、おそらく、パーソンズの多次元性というテーマのメタ方法的レヴェルでの表現が、「分析的リアリズム」であるということになる<sup>10)</sup>。

この延長でさらに推測すると、パーソンズにとって社会学は、多次元性の重視という考え方を表現するための方法の一つであった、とアレグザンダは考えているのではなからうか (諸学派を統一するという遠大な目標のための一手段という位置づけも可能であるが)。

この推測が当を得たものであるならば、アレグザンダが『構造』中における社会学の定義にはそれほどのこだわりを見せないことも理解できる。パーソンズ自身にとっても社会学は社会理論の一つの表現手段という側面が強かったかもしれない<sup>11)</sup>。

彼の学問活動の全比重が、社会学という一つの枠の内におさまっていたわけではない、とアレグザンダは考えているのであろう。

「社会学」という学問領域は一つの表現手段、あるいは途上の区分にすぎないという考え方は、上述したように、パーソンズの目標が、諸学派の統一ということに置かれていたとすれば、当然のことでもあろう。

#### 1. 4 パーソンズ研究の第三世代

ところで、パーソンズ研究を担う人々は、第一世代(パーソンズと同世代の人々)、第二世代(直接パーソンズの指導を受けた人々)をへて、現在は第三世代に移ったといわれる。アレグザンダ自身は、1947年生まれ、(すでに述べたように)ハーヴァード大学を卒業し、カリフォルニア大学バークレー校大学院でスメルサーとベラーの指導を受けた。アレグザンダは1982-83年にかけて四巻からなる大著『社会学における理論的ロジック』を出版したが、その草稿に関して、パーソンズとアレグザンダの間にはかなりの往復書簡が交わされたという (高城 1992 : 351 注1)。アレグザンダはパーソンズ研究の第三世代のはじめくらいに位置する研究者といえよう。

次章で扱うカミックの生年は不明であるが、彼もおそらく第三世代に属する研究者と思われる。1960年代から70年代にかけての「政治の季節」(高城 1992 : 4)あるいは「マイクロ革命」(Collins 1987=1998 : 121)<sup>12)</sup>の時期のパーソンズ研究と比較すると(筆者の狭い知見から判断することになるが)、アレグザンダもカミックも冷静に対象を分析しており、パーソンズをまず読みとくことに比重をかけて、そのための工夫をこらしている、という印象を受ける。世代交代が進むと、研究視角もやはり変化するということであらうか。

同じ第三世代に属するといっても、次章で紹介するカミックは、アレグザンダとはか

なり趣きの異なる考え方をする研究者である。

## 2 カミックの初期パーソンズ論

### 2. 1 社会的知的コンテキスト分析という方法

(すでに述べたように) カミックはピッツバーグ大学を卒業、シカゴ大学で学位を受け、現在ウィスコンシン大学マディソン校の教授である。2000年より *American Sociological Review* 誌の編集長をF. Wilsonと共同でつとめている<sup>13)</sup>。

彼はこれまでに、パーソンズに関する論文を約六編公刊している。それらはすべて初期のパーソンズに焦点をあわせている。本稿ではそれらのうち、1989年論文の内容を取り上げることにする。必要があれば、それ以外の五編の論文にも適宜言及したい。

彼の社会学史は、「社会諸理論が姿を現し、成長し、変化するという複雑な経験的プロセスを理解する」ことを目標とする (Camic 1981 : 1142) が、そのための方法として彼は、「社会的知的コンテキスト分析」を提案している。その方法は、次の二点からなる。第一に、ある社会学的古典を分析する場合にそれが書かれた当時の社会的知的コンテキスト (sociointellectual context) ないし社会的知的背景<sup>14)</sup>を重視する (Camic 1987 : 421, 1989 : 39)。より具体的には、その著作の内容だけではなく、その著作者に影響を与えた人々の考え、またまれにはその著作者の視野に入っていなかった思想家の考えをも参照する。第二に、その社会学的著作を制作した人が、その当時どのような社会的地位ないし社会的立場 (social location) に置かれ、そこでどのような経験をしたかを分析する (Camic 1987 : 421, 1989 : 39)。

このような分析のねらいは、次の二点に要約できる。第一に、社会学者の「健忘症の傾向」 (Gouldner 1970 : 159=1974 : 215, Camic 1987 : 422) に警告を与えることである。ある社会的知的コンテキストの影響の下でその古典的著作が書かれたとすると、そのコンテキストに属していた当時の人々には容易に理解できた内容であっても、時代の流れとともにそのコンテキストが変化すれば理解困難になるかもしれない。そういう時に当時のコンテキストに沿った解釈を提供することは、その著作の正確な読解の一助になるだろう。第二に、その著作家が複数の選択肢の中から、その時代の社会的知的コンテキストの制約をうけて、ある一つの選択肢を選んだとすれば、時代が変われば、その著作家が選ばなかった選択肢の中に、社会学の新しい視角を切り開く可能性が潜んでいるかもしれない。誇張していえば、古典の著作者の視野にはいっていなかったものにこそ、後の時代の研究者にとっては、注意して検討すべき価値があるかもしれない、とカミックは示唆しているかのようである (Camic 1986 : 1039/1041, 1989 : 1077)。アレグザンダの方法と対比的にい

うならば、「社会的知的コンテキスト分析」と並んで、この最後の点すなわち、古典の著作者の気づかなかったものの中にも有望なものがあるかもしれないと想定する点が、アレグザンダにはみられないコミック独自の特徴であるといっておいてよいだろう。

このような方法は、コミック一人のものではなく、先行者としてジョーンズ(R.A.Jones)などの名前があげられている。ジョーンズは自分たちのやりかたを、「社会学の新しい歴史」(new history of sociology)と呼んでいる (Jones 1983)<sup>15)</sup>。

## 2. 2 生物諸科学・行動主義・経済学と社会学 — 社会学のチャーターを作成するという目的 —

コミックの1989年論文では、『構造』に分析の焦点がしぼられている。本稿ではこの論文を主にとりあげることとする<sup>16)</sup>。『構造』は、その評価はわかれるかもしれないが、すでに社会学の古典としての地位を確立している。『構造』についての研究はすでに数多くなされてきているが、各研究者の見解は必ずしも一致しているとは限らない。そのような状況を打開し、『構造』をめぐるさまざまな論戦を決着させるためには、その本が書かれた当時の社会的背景やそこでのパーソンズの経験について社会的に分析し、そこで浮かび上がってくるコンテキストにその書物を位置づけた上で、どういう目的のために『構造』が書かれたのかを理解する必要がある、とコミックは主張する。

コミックの結論をやや先取りしていえば、『構造』は、当時の生物諸科学、行動主義や新古典派経済学などの勢力に対抗して、社会学を防衛し社会学の制度的な確立を図るためのチャーター<sup>17)</sup> (charter) として書かれた、というのがコミックの基本見解である。チャーターとしての性格という観点から見ると、『構造』を理解することが容易になり、これまで多くの研究者たちの見解がわかれていた諸論点について、ある程度統一的な解釈を与えることができる、とコミックは考えている (Camic 1989: 38-39)。また、この観点に立つことによって、すでに確立したグループの「イデオロギー」として『構造』を解釈する方法から距離をとることができる、とも述べている (Camic 1989: 47)。

コミックは、『構造』という本ないしパーソンズという研究者を、知識社会的に理解しようとする見解(フリーマン、グルドナー、アレグザンダらの見解<sup>18)</sup>)を批判的に検討した後、『構造』が当時のマクロな時代状況とまったく絶縁された環境の中で書かれたものではないことを認めつつも、アカデミズムとくにハーヴァード大学における先行諸科学と社会学の相対的な位置関係というコンテキストを重視している。コミックによれば、当時、大学は諸ディシプリン間のテリトリーと資源をめぐるたたかいの場であり、生物諸科学が社会問題にも適用可能であるから社会諸科学は不要である、という考えすらあった。社会諸科学の制度的確立をめざそうとすれば、生物諸科学またワトソンの行動主義心理学と

たたかわなければならなかった。新古典派経済学は、社会諸科学の中でも先頭をきって、また生物諸科学よりも若干早く制度的に安定した地位を占めていたが、新古典派経済学者の中には、生物学と心理学は認めても、新しい社会科学（つまり社会学）は必要ないという態度をとる人々もいた。社会学が当時アカデミック・ハイアラーキーの中でいかに低い地位にあったかを示す例として、当時の歴史学者ブリントンが書いた論説（社会学はパリア的な学問であると嘲笑したもの）をカミックは引用している（Camic 1989：42-44）<sup>19)</sup>。

このような背景の下で、パーソンズは、生物諸科学に対抗して、「社会科学の独立戦争」（Parsons 1959：625-626）にコミットすることになった<sup>20)</sup>。彼の目指したところは、新古典派経済学と対等な地位を社会学が獲得し、その隣に位置することであった（つまりパーソンズのプランは、後述するように、概念図式と事実との関係、学問の科学性についての新古典派経済学の考え方を、社会学に導入するというものであった）。「経済学理論と社会学理論の関係という問題」に集中する必要があると考えた、というパーソンズの回顧的言葉をカミックは引用している。また、パーソンズが新設まもない社会学科のインストラクターという低い地位にあったという彼の個人的な利害が、この目標と関係があることをカミックは否定していない（Camic 1989：44-45）。

この戦いのためにパーソンズはあらゆる利用可能な知的資源を動員し、とくに、人間の振舞いは、本質的に主意主義的であって、（遺伝と環境のほかに）共通価値・主観的目標・目的・ルールなど、つまり社会文化的な現象によって駆動されている、という見方に依拠した。『構造』は、彼が依拠したこれらの要因をひとまとめにして、「規範的」と呼んだ。

「主意主義」という考え方は、ゲシュタルト心理学者のコフカやケーラーの影響であるし、またパーソンズは、クーリーやズナニエツキの著作をよく知っていたし、シカゴやコロンビア出身の社会学者たちと個人的な交友関係をもっていた。それらの人々が1920年代～30年代に著した著作から多くの影響をパーソンズは受けていたが、それは単に模倣や引用ということではなく、彼らの状況とよく似た状況にパーソンズが置かれていて、同じ知的制度的対立者とたたかっていたことによる、とカミックは説明している（Camic 1989：45）<sup>21)</sup>。

また、『構造』のチャーターとしての性格上、そこでとりあげられるトピックスの多くは、パーソンズ個人のオリジナリティに負うというよりも、アメリカの20年代～30年代の多くの人々の努力の集大成という側面があること、また、今後も引き続き共同作業として彫琢される余地が残されていることも、カミックは指摘している（Camic 1989：43/45-46/48）。つまりここでカミックは、『構造』は一人の個人の作品であると同時に、潜在的には同業者による共同の作品という側面もある、という見方を示唆していると解釈したい。

こうして、ディシプリン間の戦いに対するパーソンズの関心が、『構造』の基本的なデザインを決めたのだ、とカミックは主張する（Camic 1989：46）。パーソンズと同様に同時代

の人々も、自分達の学問の自立的な地位を求めて戦っていたのだから、『構造』がそのような戦いのための武器を集大成したもの、ないしその戦いの記録であるということは、同時代の人々、たとえば『構造』のごく早い時期の書評者たちにはよく理解されていた。しかし、50年代以降のコメンテーターたちにはそのような経緯がよくわからなくなったようだ。反面、過去30年の間には、その経緯に気づく研究者達も現われてきた、とカミックは述べている (Camic 1989 : 45-46)。

### 2. 3 基本図式としての二分法 — 遺伝・環境 vs. 規範的要素 —

上のような状況の中で、パーソンズは行動主義者や新古典派経済学者、その他のディシプリンからの挑戦を非常にまじめに受けとめ、社会学の資格証明ないし存在証明を確立することに深くコミットした。そのような態度は、当時同じ目的のために戦っていた人々の間に共有されていた。彼らは共通して、大学という文化のなかに社会学を定義づける必要性、社会学を他のディシプリンから明確に区別する必要性、社会学の方法を明確にして社会学をディシプリンとして承認してもらう必要性、もろもろの仮説・前提・データまた種々の学問的伝統を明確にする必要性、そしてそれらを研究と理論の中で確立してゆく必要性などを意識していた (Camic 1989 : 43)。

そのような目標を達成するためにパーソンズが採用した戦略は次のようなものだった。

まず、抽象的な議論よりも経験的な調査を行うことが先だと主張する社会学者たちもいたので、彼らとの競争に勝つために (Camic 1989 : 46)、また、多様な経験的調査に精力を分散することは、まだ未成熟な社会学にとって時期尚早であると判断したので (Camic 1989 : 51)<sup>22)</sup>、調査部門をひとまず脇において、理論的、概念的、解釈的な、また社会学の学史的な問題の領域に精力を注ぐという方向に向かった (Camic 1989 : 46)。その領域で彼が依存した理論的な装置は、主に、「分析的リアリズム」(後述)と「生物学的なもの」と文化的なものという二分法などであった。この二分法は、いかえると「一方での遺伝と環境、他方での規範的あるいは価値要因」のことであり<sup>23)</sup>、前者の要因は生物学理論の担当領域に属し、また、後者の要因は文化の諸要素、あるいは宗教的、形而上学的、倫理的観念の体系に錨を下ろしているとされる (Camic 1989 : 50)。この二分法は、社会学に反対する陣営と社会学に味方する陣営、という区分と重なっていると読むことも可能である。パーソンズはこの二分法を素直に、そしてさまざまな問題に関して徹底的に使うことで、『構造』を書いたとカミックは述べている (Camic 1989 : 49-50)。

パーソンズはこの「二分法」を『構造』の中のある箇所、「本研究における偉大な二分法」(the great dichotomy of this study)と呼んでいる (SSA : 464 = 第3分冊1982 : 231, Camic 1989 : 50)。『構造』は論争的な雰囲気の中で時間的にかなり急いで書かれたので、

細かなところの論理的な一貫性を気にしている暇はなかったという。そのせいもあって、パーソンズは自分のチャーターに使えるものは何でも「価値要因」の側に組みこみ、そして反対すべきものは、「遺伝と環境」の側に位置付けてゆく、そのようなかなり大まかな論理の構築を行う傾向があったという (Camic 1989 : 50)。

パーソンズは重要な問題について、あれかこれか式のアプローチに入り込む傾向があったが、それは彼のアプローチが多くの場合、最終的にこの「二分法」に基づいているからであった。最も顕著な例は、行為からはじまって秩序問題へとつながる次のような一対の考え方であった。一方では、ランダムでアモラルで私的利益に指向する行為の網の目は、統合されていない個人主義的なカオスにつながり、他方、規範的に構造化され、価値に指向する行為の網の目は、十分に統合された社会秩序を形成する、という考え方である。このような単純化された論理は、当時の時代のコンテキストの中では、強引なものというよりも、むしろ自然なものであったので、彼のチャーターの主張を強化することに役立ったであろう、とカミックは判断している (Camic 1989 : 50)。

しかし反面、この二分法にうまくのらない現象が出てきたとき、論理に無理な負荷がかかる。パーソンズの用語法はかなり多義的であり、いくつかの問題については研究者の間で解釈がわかれることがある。その理由として、カミックは、ポレミカルな雰囲気の中で、社会学のチャーターとして急いで書かれたこと、当時の人々によく知られていたいいくつかの概念を複数の前線であえて使ったことで意味のズレが生じることがあったこと(例、「実証主義」)、そして、この二分法に基づく両極的な思考の路線を彼が突進していたことなどをあげている (Camic 1989 : 48-50)。

二分法にのりにくいものの典型例は、第一に、功利主義——パーソンズによると、目的に対する手段の選択において、合理性の基準のみが作用する、と考える立場のこと——である。「功利主義のディレンマ」とは、「目的」の背後に控える「利害」のような概念は、(合理性の規範以外の)規範的要素による支えなしには、自立し続けることは困難であり、そのために功利主義は不安定なものであるという見解を表現した言葉である (Camic 1989 : 67)。パーソンズの功利主義理解がきわめて片寄ったものであることは、カミックの1979年論文に詳細に述べられているので、ここでは立ち入らない。そのような片寄った解釈をパーソンズがせざるをえなかったのは、一つには、彼が上のような二分法に依拠していたからであるとカミックは指摘している。功利主義批判を行った第二の理由として、「功利主義」の具体的なレファレントの一つは、当時の新古典派経済学であり、「功利主義のディレンマ」という表現は、社会学を認めない新古典派経済学に対する反撃である、という解釈がなされている。その際に、パーソンズは制度派経済学がすでに新古典派に向けて行っていた批判をまとめる形で、「功利主義のディレンマ」という概念をつくったとカミックは書いている (Camic 1989 : 55)。

二分法で割りきりにくいものの第二は、『構造』中では功利主義の合理性の規範とむすびつけられて論じられている(その意味で第一のものと重なるところがある)、認知という要因である。これは人間の能動性の一構成要素であるとも考えられるが、結局パーソンズは、「遺伝と環境についての検証しうる知識」と解釈して、二分法のうちの「遺伝と環境」の側に位置付けてしまった(Camic 1989: 55)。

生物学的な欲望に近い「利害」は、「遺伝と環境」の側に配置されているが、「理念的利害」は「規範的要素」の側に配置された。そして、二分法で割りきりにくいものの第三番目のもの、「社会的に構成された利害」は、結局、共通文化諸価値の中に位置づけられた(Camic 1989: 67)<sup>24)</sup>。

二分法的思考のマイナス面は、以上のごとく、現象の具体的な多様性を柔軟にフォローすることができないという点にある。

## 2. 4 二分法と行為図式および主意主義的行為者観

「主意主義」という考え方は、基本的には、上記の二分法に基づいて形成されたにもかかわらず、パーソンズ自身はさまざまな文脈で比較的自由的な使い方をしたので、研究者の間に多様な解釈を生みだす元となっている。二つの派に分けると、ある一つの派によれば、『構造』は主意主義的行為(選択の自由、自由意志、目的、主体的な意志決定、能動性と創造性、自律性、反決定論的性質などをもつ行為のこと)を擁護するために書かれたということになるし、また別の派によると、『構造』は、主意主義の本来的なパースペクティブを理論化することに十分成功していないという評価がなされる。つまり後者の派の考えに従うと、言葉としては主意主義を表明しているが、パーソンズが実際に押し進めているのは、規範的要素による決定論的な議論であり、人間のもつ能動的で創造的な自由の側面を抑制しているというのである(Camic 1989: 89-90)。

カミックによると、たとえば、行動主義者たちが否定する一切のものを、パーソンズは二分法の論理に従って、彼のチャーターの中に、行動主義とは逆に、肯定的にとりこみ、反行動主義的概念を社会学の陣営に結集した。行為、主観性、理念的動機、シンボル、意味、理由、目的、目的-手段関係、自由で合理的で道徳的な選択などを、明確な定義や論理的整理を十分することなしに、行動主義その他の敵対者に反撃するための道具として、比較的フレキシブルに使った(Camic 1989: 65)。

こうして彼の二分法の中に、「行為」の性質を記述するために必要な概念が集められた。単位行為の図式は、手段-目的関係を中心にして構成されているが、これ(手段-目的関係を中心にする)はE・トールマン(Edward Tolman)ほかの影響であり、また有名な単位行為を記述するための五つのカテゴリー(行為者・目的・手段・条件・規範)は、ハー

ヴァードの経済学者、A・ヤング (Allyn Young) の図式 (行為者・目的・手段・手段と目的を関係づけるメカニズム) の影響であるという (Camic 1989 : 64)。このように新古典派経済学の影響を積極的にとりこんでいるのは、社会学を経済学と対等な地位につけるといふパーソンズの戦略に沿ったものであり、経済学との連続性を強調するという意味をもっていたのだろう。

ただし、パーソンズの行為の図式では、ヤングの図式にはなかった「条件的要素」がつけ加えられている。これは、究極的には「遺伝と環境」のことであり、パーソンズは彼の単位行為の図式の中にも、例の「二分法」をしっかりと持込んでいるとカミックは述べている (Camic 1989 : 64-65)<sup>25)</sup>。

パーソンズの一般的な行為観はいくつか『構造』中に書かれているが、なかでも「頑固な自然的世界の抵抗に直面しながら、諸理念を達成しようとする永遠の戦い」(カミックは、プロクターによる定式化を引用している) という見方が、この時期のポレミカルで挑戦的なパーソンズの態度を暗示しているとカミックは指摘している (Camic 1989 : 65)。

次に行為者観の問題であるが、カミックによれば、一般的に主意主義的な人間観は、当時の人々の一部では共通のものであった。パーソンズも「行為者」という概念を、反行動主義的な意味で用いた。たとえばK.コフカは、研究の焦点が人間の動物的側面から文化的側面に移るにつれ、エゴあるいはセルフという言葉が使われるようになると観察している。パーソンズもそれに倣って、行為者というのは人間の有機体ではなくて、エゴないしセルフであると表現している。しかし、パーソンズにとっては、「行為」こそが中心的な概念であるので、「行為者」「エゴ」「セルフ」について、それ以上掘り下げた議論はなされていない。行為者の分析のために必要な図式は、社会関係や社会集団と同じように、記述のために必要であれば補助的に使うという、二次的な図式の地位に置かれた (Camic 1989 : 78)。そのために、『構造』では行為者のイメージはそれほど明確になっているわけではない。

しかし、パーソンズは行為者について、おおづかみなデッサンではあるが、動物的な側面と、創造性に富む側面また道徳的側面の両方を描いている。これは彼の二分法によるが、他方、ズナニエツキイにもみられるように、当時の時代に、パーソナリティについての両極的な (bipolar) 見方がある程度共有されていたからでもある (Camic 1989 : 79)。

カミックによれば、パーソンズの主意主義の核になる意味は次の通りである。行為は遺伝や環境によって完全に決定されつくしているのではなく、行為の構造の諸要素であるところの目的、またその他の規範的諸要素によっても規定されており、これらの目的や規範的諸要素は、遺伝や環境からは独立である。このことを強調する理由は、人間の行為を研究するディシプリンは、生物諸科学や行動主義ではないことを主張するため、つまり社会学のチャーターを作るためである (Camic 1989 : 91)。

すでに述べたように、「主意主義」はいろいろな読み方がなされてきたという歴史がある。

その理由は、当時一般的であった両極的なイメージを、彼の二分法にのせる形で、そのままおづかみに使ったということの他に、パーソンズが想定する敵手によって、その強調点を使い分けたことにもよるとカミックは指摘している。行動主義者に対するとき、パーソンズは行為の主観性、選択や目的、自由な決定、能動的な主観、創造性などの概念を強調する。他方、新古典派経済学を非難するときには、秩序問題や目的のランダムネスの問題をつきつけて、規範的諸要素の役割を強調し、反面、人間の自由の強調はひっこめる、という使いわけである (Camic 1989: 90)<sup>26)</sup>。

この使いわけのうち、とくに後者の使い方に向けられたのが、「過剰に社会化された人間像」という批判 (D.H.Wrongほかによる) である。これはたしかにその通りだが、パーソンズの二分法の立場に立てば、人間の自律は規範的要素と切り離すことができない。したがって、主意主義というのは、規範的なものが介入してくることと特に非両立というわけではなく、むしろ規範的要素に依存しているということになる (Camic 1989: 79/91)。

決定論の言葉と主意主義の言葉をどうやったら調和させることができるかという問題は、パーソンズにとって第一義の関心事ではなかった。上に指摘した相手によって使い分けられた二つの考え方は、それぞれある程度分離されたコンテキストの中に置かれ、そしてそれぞれ、社会学の大義 (the cause of sociology) という運動のために働いている。したがって、この二つの考え方を矛盾なくつなぐ必要があるとは、パーソンズは思わなかったのであろう、とカミックは推測する。パーソンズが二つの考え方を折れ合わせるために提出している調停案の主なものは、次の二つのタイプである。一つは、規範的諸要素によって課される規律や拘束は、人間が義務として自発的にそれらを遵守している、というカント的な考え方である。他の一つは、具体的個人にとって規範的要素は彼が作り出したものではないが、しかし具体的な個人から眼を転じると、目的や規範は、人間一般の作り出した側面をもつ、という考え方である (溝部 1976: 23-24 注35, Camic 1989: 90-91)。

以上を要するに、主意主義について、それぞれの研究者が自分のイデオロギーを述べることは自由であるが、『構造』中の主意主義を理解するためには、その用途、つまり社会学のチャーターのために動員された概念であるという点を考慮する必要がある、これがカミックの解釈の要点である。

パーソンズの行為の概念図式及び行為者観に対するカミックの批判を、手短かに記しておく。

パーソンズの図式では、手段-目的関係が中心になっているので、それにフィットしない多くの行為を視野の外におくことになった。感情 (的行為) や習慣 (的行為)、また家族成員の世話に明け暮れる主婦の一連の行為などは、手段-目的図式にあうとは思えない。また、西洋の社会における行為には適用できても、非西洋の伝統的な文化社会にもこの図式が有効であるのかどうか。たった一つの図式では、歴史的な変異をも視野に入れた場合、多様

な行為の個性をつかみとるには不十分であろう (Camic 1989 : 68-69)。

パーソンズが手段-目的関係を行為図式にとって根本的であるとしたのは、カミックの推測では経済学で使われている手段-目的図式を社会学も採用することで、社会学が経済学の隣の地位に並ぶためであった。にもかかわらず、パーソンズには、そのような特定のコンテキストを離れて、自分の図式を唯一のものとして、普遍化するという習癖がぬきがたくあった。このことをカミックは、「ローカルなものを普遍化する傾向」と呼んで、さまざまな箇所でもくり返し批判している (Camic 1989 : 68)<sup>27)</sup>。

上のような批判の延長上で、カミックは、「行為についての一般化された理論」ではなく、「行為についての一つの社会学」(a sociology of action) を提案している。それは、行為の諸相を可變的なものととらえ、いろいろな形式の行為が生起する社会歴史的環境を理解し、またそれらの理由を理解しようとする社会学であると主張されている (Camic 1989 : 69)。

また、時代的地域的に主意主義的な行為が現われたり、そうでなかったりするかもしれない。たとえばコフカは、主意主義的行為は西洋に特徴的であるが、その他の文化社会ではそうではないかもしれないといっているという。しかし、『構造』は、時間空間をこえて、すべての行為に妥当する不変的な属性であると主意主義を定義している。おそらく、あまり主意主義的でない行為の存在を認めてしまうと、彼の二分法によれば、そのような行為は生物諸科学や行動主義の見地によって説明できるということになってしまうので、彼のチャーターを損なうおそれがあったから、彼は主意主義的行為の性格を普遍化したのであろう。しかし、カミックによれば、非主意主義的な性格をもつ行為が発見されれば、その行為の性格を規定する歴史的諸条件は何か、という分析の出発点になる可能性がある。歴史的な変化を視野に入れる必要がある。主意主義を歴史化することが必要である、とカミックは提案している (Camic 1989 : 93)。

## 2. 5 二分法と秩序問題

行為および行為者につづいて、次に本節では秩序問題を取りあげよう。パーソンズの課題は、現実の社会がこの秩序問題をどのようにして解決しているかを説明することである。カミックによれば、秩序問題はその当時の社会学者によってよくとりあげられていた、いわばはやりの話題であった。しかし、約三世紀も前に書かれたホブズの仕事を引きあいに出したこと、秩序問題についていくつかの概念を編み出したこと、また功利主義を秩序問題とからめて論じたことはパーソンズの独自の発想であったという (Camic 1989 : 83)。

カミックによれば、この秩序問題は、パーソンズの1934年に書かれた論文に初めて登場するが、新古典派経済学批判の文脈とからめられている。その批判は、経済学的な分析で

は暴力と詐術を抑制するためのメカニズムは説明できないというものである。経済学・生物学・行動主義心理学の担当するフィールドは、ランダムな行動が生起する分野である、とパーソンズは考える。パーソンズがランダムネスという言葉を使うとき、そこにはアナキーという意味がすべりこまされている。政治学は権力を扱うが、権力が暴力に転化することを抑制するメカニズムの説明ができない。あるいは、政治学を国家の成立と結び付けて考えれば、国家のない社会にも秩序は存在するから、政治学は秩序問題を十分に説明できるとは考えられない (Camic 1989 : 82-83)。

最後に残っているものは共通価値要素の作用である。これに立脚して社会学という科学が成立すると主張される。共通価値要素がどのように働いて「暴力と詐術」を抑制するかといえば、第一に、究極的目的というものは、共通価値ないし規範的諸要素が姿を変えたものであるとすれば、その究極目的に連なる個々の目的は、行為者のエゴイスティックな衝動を、内面化された理念に置き換える。行為者はこの理念を自己利益のためではなく、理念それ自体のために追求するようになるだろう。第二に、究極目的が社会の成員に共通であるとすれば、それは、成員間にある種のまとまりを供給する。第三に、共通価値が規制的ルールシステムへと具体化されると前提するのであれば、この規則の体系によって暴力や詐術を手段として採用することが禁止される。それらの規則は、道徳的権威を帯び、人々はそれらに対して義務や尊敬という感情から従う。したがって、現実の社会が戦争状態ではなく、比較的自発的な秩序を持つのは、規範的諸要因つまり社会学的諸要因の作用の結果である。以上のごとく、パーソンズが秩序問題を扱うやり方をみると、問題それ自体への関心というよりも、諸ディシプリン間の棲み分けへの配慮のほうが先に立っていることがわかる、とカミックはいう (Camic 1989 : 83)。

パーソンズのこの結論は、R.ダーレンドルフによる批判にはじまって、多くの人々から批判された。パーソンズは静的で過度に統合された社会をイメージしており、コンフリクトの要素を無視している、という批判である。ただし、パーソンズ自身は、『構造』中で、完全な統合という一つの限界的な極端なタイプを定式化していると断っている (溝部 1979 : 22 注26)。統合の度合や共通価値システムの種類にはいろいろな変異がありうることも、パーソンズは認めている (Camic 1989 : 83-84)。

もう一つの批判は、次のようなものである。ひとくちに統合—不統合といっても、そこには、たとえば政治的、経済的、規範的、シンボリックな、コミュニケーション的、動機的な源泉から発生するさまざまな問題がいっしょになっている可能性がある<sup>28)</sup>。にもかかわらず、パーソンズは彼の二分法に基づいて、不統合の諸源泉を無制限な利害と欲望という条件的要因に同化させ、また統合の諸源泉を規範的要因という社会学の切り札に還元してしまうのである (Camic 1989 : 84)。

つまり、『構造』における秩序問題の論じられ方は、歴史的な具体性に乏しく、経験的な

研究と断絶しているのがその欠点であり、かつ特徴なのである。パーソンズは秩序問題という一つの一般的問題を扱うときに、その問題とその解決策を一般的な命題として単数形でしか表さない。この点が、他の研究者から問題視される点であり、前節の引用のくり返しになるが、特定のローカルなコンテキストから発生した問題を普遍化している（つまり過度の一般化）とカミックは批判するのである（Camic 1989：84-85）。

歴史性の欠如が生じた理由を、カミックは次のように説明している。歴史性を持つということは経験的な問題に十分に立入るということだが、そうすると社会学という科学の内容の中心は、経験的な問題ということになる。しかしそうすると、すでに確立された諸科学の内容となっているのは一般的な問題なのだから、確立された諸科学の外に社会学は位置していることを認めることになる。そういうわけで、パーソンズはあくまでも一般的諸問題にこだわったのであろう、とカミックは推測している。パーソンズが経験的研究にあまり立入らずに、理論的方法論的側面に主力を注いだことの原因の二つはすでに引用した（本稿13頁）。ここであげられている理由は、三つ目の理由ということになる（Camic 1989：85）。

パーソンズには社会学を自然科学と同じように、一般化された法則を追求する科学にするという決意があった。だから歴史的出来事を重視する観点をとるわけにはいかなかった。また、規範的諸要因と他の経済的あるいは政治的諸要因による解決法といった相互連携をあまり望まない傾向があった。この傾向をカミックは「排除による議論の誤謬」(the fallacy of argument by elimination) の一例であるとみなしている（Camic 1989：88）。

秩序問題に伴って使われている二つの概念「事実的秩序」と「規範的秩序」について付言しておこう。これらの概念にも、他の一部の概念と同様に多義的な解釈を生み出す傾向がある<sup>29)</sup>。しかし、カミックの示唆に従って、これらの概念も二分法から導出されていると考えれば、「事実的秩序」とは、「遺伝と環境」に規定された人間が私的利益の拡大に奔走し、互いに衝突しあって、アナーキーな状態に近づいている秩序のこと、「規範的秩序」とは、「規範的諸要素」に規定された人間が、道徳を守り、諸理念に指向して行為し、社会の秩序が整然と保たれている状態のことであろう。文脈によっては、多義的な解釈が可能であるとしても、それは彼特有の大胆な使い方のせいであると考えことにすれば（Camic 1989）、これら二つの概念もたいへんわかりやすいものであるということになる。

この二つの概念が理念型的なものなのか、それとも、分析的リアリズムに従った概念なのか、という問題は残る。パーソンズの初期論稿集への序文の中でカミックは、1927年にハーヴァードの経済学科に移籍した後に、パーソンズは制度派の影響を脱し、新古典派へと近づき、「分析的リアリズム」の考え方を吸収し、そしてその後、社会学科に移ってから「秩序問題」に言及しはじめたと述べている。したがって、「事実的秩序」と「規範的秩序」という概念も、分析的概念であると考えられる。しかし、もともとパーソンズの二分法も

基本的には、分析的概念であるというべきだが、二分法自体がおおづかみに構成されているのであるから、分析的概念なのか理念型概念なのか、こだわることにそれほどの意味はないかもしれない（「事實的秩序」というネーミングが誤解を招きやすいのは確かである）。

なお、少し前に引用した（本論文19頁参照）、規範的諸要素の秩序形成作用における三つの前提について、カミックは詳細な批判を展開している（Camic 1989：85-87）。

## 2. 6 概念図式と事実に関する方法論 — 分析的リアリズム —

チャーターを書くためにパーソンズが依拠した二つの理論的装置のうち、「生物学的なもの」と文化的なものとの二分法」についてはすでに解説したので、この節では、「分析的リアリズム」についてのカミックの見解を要約する。

すでに記したことのくり返しになるが、パーソンズの基本戦略は、社会学を当時の自然諸科学と同列のものにすることであった。とくに経済学と対等の立場に立つことであった。その際、生物諸科学、行動主義、経済学が、社会学をひとつの科学として認知しない限りにおいては、パーソンズはそれらの先行諸科学を攻撃したり、あてこすったりするが、しかし彼の本音は、それら先行諸科学の仲間にならないということではない。逆に、先行諸科学から排除されない科学になることを目標にしていたのである。

カミックは次のように書いている。すでに引用したブリントンの論説に対する一部の社会学者の反応は、行動科学者の客観主義的な科学の基準によっても守ることができるような社会学を作らねばならない、という気運だったという（Camic 1989：43 n.6）。カミックはバニスター（R.C. Bannister）の研究を引用しているが、要するに、攻撃者の基準を自分たちの基準にしておく方が安全である、という考え方であろう。攻撃者と自分達の差異を必要以上に際立たせることは避ける、という行き方であった。

また、カミックは1987年の論文で、J.ベン-デイヴィッドとR.コリンズ（J. Ben-David and R. Collins）の次のような考え方を引用している。19世紀においては、生理学の方が心理学よりも高い地位を保っていた。生理学において当時の進んだ方法を学んだ者たちが、自分達の昇進の可能性を外部に求めて、より低い地位にあった心理学に移り、より高い地位にあった生理学の進んだ方法を心理学に移植することで、自分達の職業的地位を格上げすることを試みた（Ben-David and Collins 1966：460, Collins 1994=1997：27, Camic 1987：424）。コリンズらのこの命題をより一般化して、パーソンズのチャーターに適用するならば、社会学と経済学の関係が焦点になるとカミックは考えているようである。

パーソンズは、価値要因が生物学的諸要因から分析的に独立していることを、彼の「二分法」において強調した。そこから、方法論の問題に移ると、二つの考え方がありうる。

一つは、対象の質が異なるのだから、方法論も異なる。つまり、自然科学の方法論と社会学のそれは異なるという、方法論的な二元論の主張である。第二の考え方は、対象の質はやや異なるが、しかし（必要な修正を認めた上で）自然科学の方法を採用することができる。したがって、社会学に他の先行諸科学と何ら変わるところのない科学のステータスを与えることができるというものである。パーソンズは後者の筋書きを書いて、方法論的二元論に近づくことを極力回避しようとした（Camic 1989 : 51）。

規範的な諸要因は、価値要因に錨を下ろしており、その価値要因は、経験的な世界をこえて、宇宙の非経験的な側面の方向を向いている。しかしそれにもかかわらず、価値要因および規範的諸要因もやはり経験的リアリティに参与している。その意味で、社会学の対象のレベルは自然科学のそれとは区別されるが、同じ方法で扱われることに対して開かれている、とパーソンズは考えていたという（Camic 1989 : 51）。「経済学理論と社会学理論の関係の問題」に集中する必要があると考えたというパーソンズの回顧的な言葉を、以上のような文脈の中においてみると、カミックが次のように解釈するのも理解できるように思われる。つまり、パーソンズは新古典派経済学の方法論を導入することによって、社会学を他の先行諸科学と比較しても遜色のない科学として確立しようとした、という解釈である。

当時のパーソンズが新古典派経済学をどのようにみていたか、カミックは次のようにまとめている。経済学という現に傑出した学問の偉大な源泉は、その方法にある。その方法は、理論の形式に関しては、自然科学のモデルに非常に近いところにある。つまり、一般化された分析的な理論という形式である。もしも社会学がこれとアナログなアプローチ法を採用するならば、社会学の分野は経済学理論と同じレベルに位置することになるだろう（Camic 1989 : 53）。

こうして『構造』における、概念図式（ないし準拠枠）と事実の関係に関する方法論は、主に新古典派経済学をモデルにしたものになった、とカミックはいう<sup>30)</sup>。この点を論証するために、カミックは、1920年代から1940年にかけて書かれたフランク・ナイト（F. Knight）の5点の著作からの詳細な引用をおこなっている。パーソンズはハーヴァードの経済学科のインストラクターになったときに、新古典派経済学の方法論的立場を知った。ナイトは、ハーヴァードにはいなかったが、パーソンズとは個人的な親交があったという（Camic 1989 : 51-52）。

カミックの要約に従って、ナイトの考え方を手短かに引用しておく。経済学は真の、また精密な科学である。それは不変的な法則に到達することができる。その点では、数学や力学と変わりがない。すべての一般的真実は、結局、経験からの帰納である。しかし、帰納だけでは膨大な事実の集積ができるだけで、それでは意味がない。理論と離れて事実が存在するということはいない。観察は科学者の関心と相関するが、科学者の考えは、彼

の目的や概念や感情や形而上学的な観念によって浸透されている。その科学者のつくりあげる理論というものは、抽象的で、一般的に重要と考えられる現象のある側面を選択したものである。その理論は、選択した側面にだけ関わって、他の側面を排除している。経済学は人間行動の経済的な側面に関心を集中する。そして、理論的な原理と細かい事実に関する研究の間の相互作用 (interplay) から、一つの分析的な (analytical) 構造が構成される。それは、選択的な意味でのリアリティの記述である。

カミックの整理によると、ナイトの見解は、結局、演繹と帰納、両方の相互作用 (interplay) から理論がつくられ、またその理論は抽象の産物である、というものである (Camic 1989 : 52)。

このような考え方は、ナイトだけではなく、A.ヤングその他の人々の著作にもあらわれていた。パーソンズはこのような考え方を、彼自身の方法論的立場となし、「分析的リアリズム」<sup>31)</sup>と名付けた。

この「分析的リアリズム」という名称はおそらくパーソンズのオリジナルなものと思われる。しかし、ナイトその他の著作の中でも、“analytical” “reality”という用語は、断片的ではあるが使用されており、パーソンズはそれらの語をヒントにこの名称を発案したのであろう。

第1章1節でも触れたとおり、『構造』中では、「分析的リアリズム」という用語が登場するのは、最終章の第19章である。その書物は、最初の章から、「分析的リアリズム」という方法論的立場に基づいて書かれていると思われるが、はじめの方にその立場のくわしい説明がないのは、読者に対していかにも不親切である。

その理由として考えられるのは、カミックが他のさまざまな箇所述べていることを参考にすると、以下の二つである。第一に、ハーヴァードでは既によく知られていたものを摂取して、パーソンズは自分の方法論的立場を形成したのであるから、そのコンテキストでは、自分の立場をわざわざ詳しく説明しなくても話が通じたので、定式化された説明は最後にもってきた、という推測が可能である。第二に、カミックによれば、最後になって全体がまとめられると、読者になるほどと納得される——これはチャーターの常套的な形式であり、『構造』はその形式に従って書かれている (Camic 1989 : 48) から、という事情が推測される。

ナイトが考えていたのとはほぼ同様の方法論に、パーソンズはその他のところでも出会っていた。パレートとマーシャルの著作、ハーヴァードの経済学者たち、ヤング、カーヴァー、トーシヒ、テイラー、シュンペーター、それからハーヴァードにおける科学方法論に関する権威であったヘンダーソンとホワイトヘッドたちの見解である。最後の5人（及びナイト）については、方法論的な思考の上で、特に影響を受けたとパーソンズは『構造』その他の箇所記している (Camic 1989 : 52)。従来、初期パーソンズに方法論的影響を与え

た人としてはヘンダーソンやホワイトヘッドなど今日でも有名な人物の名前があがることが多かったと思うが、ナイトやヤングの影響を掘り起こしたことは、カミックの「社会的知的コンテキスト分析」という方法の強味が発揮された結果であるともいえよう。

パーソンズが経済学の方法と等価なものを採用し、普遍的な法則の追求を宣言したということは、その反面、彼の同時代の社会学者たちと重要な点で袂をわかったということの意味する。彼の採用したアプローチは、社会学の中ですでに形成されていた次のような二つの関心を取入れることに失敗した。第一に、主観性と意味の問題。カミックは、V.リッツ (Victor Lidz) の研究を引用して、パーソンズは自然科学の方法に一致するような方法論を採用したから、理解という方法を十分摂取することができなかった、と述べている (Camic 1989 : 54)。

第二に、パーソンズは歴史的な多様性という問題 (行為および行為者観における批判と同一の線上にある問題) をうまく取込むことができなかった、とカミックは批判している。

『構造』中のパーソンズは新古典派の議論に従って、特定の具体的現象を説明することは、社会学のような分析的諸科学の仕事ではなく、歴史的諸科学の仕事であると主張した。歴史的諸科学はある具体的な現象を、分析的諸科学のそれぞれの概念図式に従って、分析的諸要素に分解し、それらの分析的要素に具体的な変数値を与えながら、その現象を記述し、分析的諸科学の提供する法則を使ってその現象を説明する。この考え方には、分析的諸要素が歴史的に多様であるという可能性がはじめから排除されている、とカミックは批判する (Camic 1989 : 54)<sup>32)</sup>。

こうして方法論においても、またもパーソンズは、チャーターを書くためには重要であったかもしれない特定の法則を、その分野のあるべき唯一の法則にまで格上げして一般化するという誤りをおかした、とカミックは批判している (Camic 1989 : 54)。

パーソンズの方法論に関して、近年の研究者たちの間で意見の分かれている一つの問題をカミックはとり上げて整理している。ある一群の人々は、『構造』は経験主義者と実証主義者によって書かれたという見方をしている。また、別の立場の人々は、『構造』は、当時のアメリカの実証主義的、経験主義的な前提と縁を切って、ポスト実証主義、アンチ経験主義的な考え方への移行を表現しており、その移行は革命的なものである、と主張している。カミックによる用語の簡単な定義を引用しておく。「経験主義とは、科学的な知識は主にシステマティックな観察、あるいは感覚器官を通じた経験から生まれる、という考え方」を指し、また、「実証主義とは、自然科学も社会科学も共通の方法に基礎を置いていて、コンスタントな斉一的法則を求めている、という考え方」のことである<sup>33)</sup>。そして、「ポスト実証主義、およびアンチ経験主義とは、科学的知識は本質的に、理論的あるいは分析的抽象を前提にしている、という考え方」のことである。この後者のグループは、パーソンズの新カント派的立場への接近を重視するもので、アレグザンダーやミュンヒなどがその一

員である (Camic 1989 : 51)。

カミックの整理は、一言でいえば、次のとおりである。初期パーソンズの立場は、理論的抽象と事実の両方を重視していて、両者の相互作用を認めていたから、実証主義・経験主義とポスト実証主義・アンチ経験主義のちょうど中間に位置していた。ヘンダーソンの見解に従って、パーソンズは、観察された事実以外に事実というものはない、と考えていた。見方によっては、理論的抽象の方をより重んじていたという言い方もできるかもしれないが、上述のごとく新古典派経済学からの影響関係を考慮すれば、二つのグループによるそれぞれの解釈 (実証主義とポスト実証主義) のちょうど中間をパーソンズは採用していたのだ、というのがカミックの解釈である (Camic 1989 : 51/53)。

ここで婉曲ではあるが、カミックはアレグザンダの解釈を十分意識して、批判していることに注意したい(カミックの1989年論文では、アレグザンダ批判はこの箇所ですら二～三回目になる)。ただし、カミックは初期パーソンズの方法論に限っているのに対し、アレグザンダは、パーソンズの「インターチェンジ・モデル」を重視していることからわかるように、パーソンズの後期の方法論に力点をおいて述べているのかもしれない。したがって、両者がすれちがっている可能性を考慮しなければならない。

アレグザンダが、四機能パラダイムを「インターチェンジ・モデル」と呼ぶことからわかるように、パーソンズは、初期の「準拠枠」(対象を分析的に抽象して記述するのに必要最小限のカテゴリーからなる図式) から、後期の「モデル」(社会の仕組みを単純化して表示する工夫) へと、その依拠する方法論を変化させたという解釈が成立する可能性もあると筆者は思う。そのような解釈が当たっているなら、初期～後期を通して見た場合、パーソンズの立場は、カミックのいう両者の解釈のちょうど中間よりも、ポスト実証主義よりに寄っている可能性を否定できないように思われる。

なお、カミックの1987年論文では、上述の実証主義・経験主義/ポスト実証主義・アンチ経験主義の問題のほかに、理論的スコープの包括性/限定性、分析対象と概念の関係、科学的構成物の普遍性/相対性、という三つの問題が、社会科学の立場と社会学の立場ごとに区別されて詳細に論じられている (Camic 1987 : 423/431-432)。

## 2. 7 中間的セクター・三つの創発特性・究極的価値 — 社会学のニッチ<sup>34)</sup> —

パーソンズは、社会学にとっての第一次的な所与は、網の目のように広がる行為システム(手段-目的の連鎖)からなる全体である、と考えていたようだ。単位行為は、その全体から抽象したものとみなされている。さて、この網の目のように広がる行為システムを、ある方向にずっと辿っていくと、究極的目的に達する。また逆の方向に辿っていくと、究極的手段あるいは条件にたどりつく。その両極の間の部分は手段-目的連鎖の中間的セク

ター (intermediate sector) と呼ばれている。この中間的セクターにおいては、単位行為には見られなかった三つの創発的特性 (emergent property)<sup>35)</sup>があらわれるとパーソンズは観察する。経済的合理性、強制力の合理性、共通価値統合の三つの創発特性である。本章5節ですでに説明したことを別の表現でいいかえると、強制力の合理性の次に(論理的にいうと)、社会秩序の問題が出てくる。そして、中間的セクターの最上端に位置する究極目的の要素(あるいはその源泉に位置すると想定される共通価値要素)から生じてくる共通価値統合という創発特性の領域で、この秩序の問題が扱われる。パーソンズの問題と論理にとっては、この共通価値統合が、論理的には最後の創発特性とみなされ、それによって秩序問題が解決されることになる。このことが、社会学という科学を正当化する支えとなる。中間的セクターをめぐる以上のようなパーソンズの議論を、カミックは、レヴィン(D.N. Levine) やラウブザー (J.J.Loubser) の作成した表を参考に、表1のようにまとめている (Camic 1989 : 72)。

表1 中間的セクターにおける構造的側面・創発特性・個別科学の  
対応関係

行為システムの 構造的側面	対応する創発特性	対応する個別科学
究極的条件	なし	生物学的諸科学
手段-目的連鎖の 中間的セクター：		
技術的要素	なし	技術工学
経済的要素	経済的合理性	経済学
政治的要素	強制的合理性	政治学
究極的目的	共通-価値統合	社会学

注 出典：Camic(1989 : 72)、表のタイトルは引用者のもの。「共通-価値統合」は中間的セクターに属するの、属さないのかははっきりしないが、その問題にはここでは立入らない。

このようにして、社会学は「共通価値による統合という特性によって理解することのできる限りにおける、社会的行為体系に関する分析的理論の展開をめざす科学である」と定義される (SSA : 768=989 : 191)。

厚東洋輔によれば、「社会」の用法は二つあるという。国家・市場と対比されるような「社会」と、国家・市場を内に包括し、全体性が強調されるような「社会」の二つである (厚東 2000 : 48)。前者の社会を対象にするものを、「個別科学としての社会学」、後者の社会を対象にするものを、「包括的な社会学」(あるいは「総合社会学」と呼ぶことにしよう。

パーソンズの上記の定義によって、社会学のニッチが明示されたわけだが、その際、彼

の定義は、「個別科学としての社会学」を想定しているのだろうか、それとも「包括的な社会学」を想定しているのだろうか。

定義を形式的にみる限り、また、カミックの「社会的知的コンテクスト分析」の結果を参照する限り（パーソンズのチャーターは、経済学の隣りに社会学が並ぶことを望んで書かれたのだから）、ここでは「個別科学としての社会学」が想定されていると考えられる。しかし、カミックによると、パーソンズの考えたことは、もう少し含みのあるものだったかもしれないという。（たとえば「秩序問題」の論じ方をみるとわかるように、）社会構造あるいは社会構造の諸特性の主なものは、究極的価値から派生するという前提をはさみこむと、この定義の焦点は、（共通価値統合を通して最終的には）価値要素にあてられている、という解釈も不可能ではないかもしれない。すると、はさみこまれた前提が誤りでない限り、社会学は価値要素—究極目的—共通価値統合という系列を対象にするにとどまらず、それ以上のもの、つまり、（社会学以外の経済学や政治学の領域における諸目的、諸ルールも共通価値から派生するものであるという前提を置けば、）経済的合理性や強制的合理性という創発特性をも視野に含みうる、という帰結に導かれる。表1で、「究極目的」（およびその源泉としての究極価値）が、中間的セクターの上端あるいは上位に位置づけられていることは、シンボリックな意味をもつのかもしれない。もし、社会学の焦点がこの究極目的に置かれると明示的に定義されたならば、（パーソンズのいくつかの前提をひとまず認めておくとすれば、）「包括的な社会学」あるいは友枝敏雄のいう「スーパー社会科学」（友枝1996：35）が提示されたということである。「包括的な社会学」（「スーパー社会科学」）か「個別科学としての社会学」のどちらに力点があるのか、判然としないところがある。しかし、カミックの表現では、少なくとも、三つの創発特性のハイラーキカルな関係の中で第一のポジションを占める要素（共通価値統合）を対象領域とする科学が社会学であるということになる（Camic 1989：74-75）<sup>36)</sup>。

『構造』中ではこのような「包括的な社会学」あるいは「スーパー社会科学」への道は、実際には明示されなかったといつてよいだろう。それを明示すれば、他の社会諸科学の反発をかうことは必至であり、社会学のチャーターを書くというパーソンズの使命を損なったであろうから。

後期のパーソンズをみるといよいよはっきりすることだが、初期においても、「スーパー社会科学」的な指向と「個別科学としての社会学」的な指向が、わかちがたく結びついている。これは、パーソンズの生涯を通じて変らなかった彼の学的な特徴というべきものであろう。私見では、この二つが結びつく理由は、以下の二つが考えられる（アレグザンダの見解は本稿第1章3節を参照）。

第一に、「残余社会科学」（友枝 1996：35）として出発した社会学が、アカデミズムの世界で自己のニッチを確保するためには、社会科学の見取り図を一通り描いて、先行諸科

学を位置づけ、そして社会学の場所を確保しなければならないだろう。『構造』中では、社会を、手段-目的連鎖からなる行為の網の目とイメージし、創発特性を析出して、経済学・政治学・社会学を位置づける議論がそのための作業である。

その際に、諸科学の過度の縄張り競争を沈静化させるという副次的な働きが、その「残余社会科学」の仕事の一部となる可能性もある。『構造』は、そのような仕事の総指揮を社会学に委任した、というのがカミックの解釈のようである (Camic 1989 : 75)。

第二に、これはパーソンズの個人的な経歴に関係することだが、アマーフト大学の学部時代からヨーロッパ留学を経て、ハーヴァードの経済学部のインストラクターになるまでは、彼は、アメリカの制度派経済学の影響下にあったという。制度派は、社会問題を扱う場合に、専門領域をあまり限定せずに、比較的みれば、「スーパー社会科学」寄りの性格をもっていたといわれている。パーソンズはハーヴァードにきて新古典派へと変身したとはいえ、やはり制度派の影響がどこからか立昇ってきているのではないか。

制度派の影響の下地をさらに遡るとすれば、タルコット・パーソンズの父エドワードが若い頃に、アメリカの社会改良をめざす「社会福音運動」にコミットしていたことがあげられよう。高城和義によれば、「タルコット……〔は〕社会福音運動の申し子であった」(高城 1992 : 27)。社会全体に注ぐまなざしを、タルコット・パーソンズは、父エドワードの社会改良への指向から受け継いだのではあるまいか。とくに父エドワードが、社会改良の方法として、キリスト教と社会主義のどちらが優れているかをテーマにして論文を発表していることに注目したい (高城 1992 : 15-23)。

社会主義に関する評価は、父と息子でくいちがった時期もあったようだが、一つの社会体制に注目するばかりではなく、二つの社会体制を較べるという比較社会論の視点を、タルコットは父エドワードから (あるいは父の世代から一つの思考様式として) 受け継いだのではないかと筆者は想定したい。この社会主義的社会とアメリカ社会の比較社会論という視点は、たとえば『社会体系論』(1951)のXI章にまとめられている<sup>37)</sup>。

さて、行為の網の目としての中間的セクター、三つの創発的特性などに示されるパーソンズの考え方を、カミックは一面では高く評価している。表1に示されるようなパーソンズの考え方は、行為とシステムの関係(マイクロ-マクロ・リンク)についてのしなやかでオリジナルなアイデアであると述べ、比較の対象としてアレグザンダほか編になる1987年の書物を参照注にあげている (Camic 1989 : 72-73)。

反面、このパーソンズの考え方は、社会学のチャーターを作るという努力と深く結びついてきたために、短所もあるという。第一に、経済学や政治学の定義が、今日からみれば狭すぎる。しかし、当時の新古典派経済学や政治学の水準を考慮すれば、今日のような幅広い活動内容を反映するような定義は必要なかったともいえる (Camic 1989 : 74-75)。

第二に、パーソンズの社会学の概念図式は、手段-目的関係のような行為の見地の言葉でできあがっている。それ以外の概念図式は、『構造』という本の中には存在する余地がない。たとえばズナニエツキは、すでに1934年に、社会システムは社会的行為、社会的役割、社会関係、社会集団から構成されている、したがって、四つの準拠枠が必要になる、と述べている。しかし、パーソンズは、これらの準拠枠は「速記法」にすぎないとみなしている。パーソンズはおそらくチャーターの論理を優先させて、社会学者の数だけ社会的パースペクティブがあるという嘲りに、ズナニエツキのやり方では対抗できないと考えたのだろう、とカミックは指摘している。当時のパーソンズにとっては、唯一の統一的な図式でもって、社会学を構成することが、一番大事なことであったのだろう。彼にとって、「社会的なもの」とは、結局のところ、規範的諸要素あるいは共通価値要因なのである。彼が基本図式とした「大二分法」に従いながら、「社会的なもの」<sup>38)</sup>の要因の数をできるだけ少なく限定しようとするれば、どうしてもそうなる。それが当時のパーソンズに可能な唯一の選択であったろう。しかし、彼の図式が他の図式を包摂していると一般的に主張する傾向がなきにしもあらずであった。図式それ自体の抽象性を認めながらも、他方で、自分の図式の普遍性を主張してしまうことがあった。何度目かのくり返しになるが、これはパーソンズの行き過ぎである、とカミックは批判している (Camic 1989 : 76-77)。

当然のことだが、今日実際に社会的なものを分析する際には、行為図式だけではなく、他の準拠枠が必要になる。たとえば、交換、コンフリクト、支配・服従、生産関係、階級関係、コミュニケーションの準拠枠など。これらの準拠枠をいちいち行為の見地に翻訳するのは、むだなことであろう。チャーターをつくる目的のためには、唯一の図式を前面に出すのが、周囲の人々にわかりやすかったのかもしれないが、社会学が一応制度的に確立された今日では、そのチャーターに義理立てする必要はないかもしれない。パーソンズの行為図式だけでは現実の多様性をとらえることはできない、と(またもくり返しになるが)カミックは批判している (Camic 1989 : 77-78)。

話を戻すことになるが、パーソンズの社会学の定義において、焦点がおかれているのは、共通価値統合なのか、それとも究極目的の背後に存在すると推測される共通価値なのか、という問題に関連して若干付言しておきたい。上述したように、もし後者の共通価値に相当の力点が置かれつつ定義がなされているのなら(また、もし彼の置いている諸前提が正しいのなら)、パーソンズが定義しようとしている社会学は、「包括的な社会学」あるいは「スーパー社会科学」の性質をある程度帯びることになるだろう。

この問題に関連して、カミックは、アレグザンダの「多次元性」の考え方に、やんわりと批判的コメントを付しているようだ。三つの創発特性が並列され、そのうちの 하나가社会学に割りあてられるというなら、形式的には、たしかにパーソンズの図式は、「多次元的」であるといえるが、しかし、中間的セクターの上端にある「究極目的」が社会学の対

象であるとするなら、パーソンズの論理に従うと、「社会的なもの」の唯一の源泉を社会学が扱うということになりはしないか。その時、パーソンズの図式が多次的に構成されているといえるのかどうか(多少筆者が言葉を補っているが)、というコメントである(カミックの1989年論文の中では、第三ないし四番目のアレグザンダ批判である)(Camic 1989: 74)。

筆者の私見を述べたい。すでに述べたように「残余社会科学」である社会学がどこかで「スーパー社会科学」的性格を帯びることは避けられない。しかしその限りでは、「スーパー社会科学」であることと、「多次的思考」とは、必ず非両立であるとはいえないだろう。けれども第二の可能性として、「社会的なもの」の唯一の源泉を独占的に対象とするような「スーパー社会科学」であれば、「多次的な思考」とは非両立であると考えざるをえないかもしれない。『構造』は、これら二つの可能性のうち、チャーターの性格上、前者の途を選択しているが、しかし、隙があれば、後者の可能性が出番をうかがっている、という印象をぬぐうことができない。

アレグザンダ自身は、社会学をどのように定義するか、という問題にはさしたる関心を示していないようである(第1章3節で解説したようにパーソンズは社会科学の統一を目標にしていたとアレグザンダは解釈しているが、その目標にアレグザンダ自身共感しているのかもしれない)。(すでに第1章2節注7で述べたことの繰り返しになるが、)アレグザンダは、たとえば、『社会体系論』において、パーソンズが社会学の中心的焦点として「連帯」をとりあげることがあるが、これは社会学というディシプリンについての混乱であり、それは定期的に表面化する一種の「最後の頼りの綱(あるいは切り札)」(last resort)なのだ、と述べている(Alexander 1983: 274)。アレグザンダにとっては、「多次的思考」が社会学の長所なのであるから、ある限度をこえて「個別科学としての社会学」の範囲にとじこめることは、彼には考えられないことであろう。

なお、カミック自身は、究極的価値から社会構造の諸特性が派生するという、パーソンズが使ったと思われる前提を、疑問視し、批判している。これについては、本章5節の最後のところに記した当該箇所を参照してほしい。この点を手がかりにして、カミック自身の立場を推測すれば、「社会的なもの」の唯一の源泉というような発想はとっていないだろう。また、中間的セクターにおける三つの創発特性を並列するというような、社会の見取り図の書き方は彼の容認するところであろう。このように考えれば、この点までは、アレグザンダもカミックも、社会学の性格について(微妙にすれ違いながらも)共通点をもっているようだ。

二人が明確に異なるのは、カミックは、個別科学としての社会学の枠内で、より具象的な方向に向かって、多様性をすくいとることに意味を見出そうとするのに対して、アレグザンダは、反対に、(おそらくは個別科学としての社会学の枠をこえて)一般化的な方

向に向かいつつ、多次元的思考を強調する、という点である。どちらの立場をよしとするか、各人の考え方によるだろう。

## 2. 8 収斂テーゼ — つくられた社会学理論の歴史 —

本稿で主にとりあげているカミックの1989年論文には、「IV 社会理論の歴史の説明」(Camic 1989 : 54-63)というパートがあり、パーソンズの功利主義論からはじまって、収斂テーゼ、そしてそのテーゼの『構造』における位置づけまで、かなり詳細な検討が行われている。しかし、功利主義論については、カミックの1979年論文があるので、そちらを参照していただくことにして、ここではパーソンズの功利主義論については、省略したい(本章3節で簡単にふれた)。また、パーソンズの収斂テーゼを本気で真に受けとる人も今日では多くないと思われるので、収斂テーゼに対するカミックの詳細な批判も、なるべく簡略化して紹介したい。

すでに本章3節でふれたように、功利主義(及びそのレファレントの一つとしての経済学)はパーソンズの「二分法」では扱いきれないので、「功利主義のディレンマ」という問題を定式化し、功利主義がうまく解けなかった問題を、主意主義的行為理論が解く(秩序問題と規範的要素をむすびつけることによってとく)という筋書きをパーソンズは書いた。その筋書きをさらに権威づけるために、19世紀終わりごろから20世紀のはじめにかけて、ヨーロッパの何人かの思想家がくしくもこの主意主義に収斂してきている、という社会学理論の歴史を彼は追加した。カミックの結論を先取りしていえば、この歴史は、あまり本当らしくなく、作り物であって、そのためにとりあげられている思想家についての解釈の歪みがいろいろなところで出ている。非常に定義を緩めればどんな理論でも収斂しているということは可能である、とカミックは指摘する(Camic 1989 : 54/60)。

収斂テーゼの中で、マーシャル、パレート、デュルケム、ウェーバーの4人だけがなぜとり上げられたのだろうか。その理由として、カミックは以下の二つを考えている。第一に、これらの4人はいずれも、経済学から、規範と価値の領域である社会学へ移動しつつあるかのような記述がなされている。これは、経済学に抗して、社会学のチャーターを確立するための戦略の一つであったかもしれない、とカミックは示唆している(Camic 1989 : 59)<sup>39)</sup>。

第二に、前者の二人、マーシャルとパレートは、当時のハーヴァードの経済学分野の人々にもよく知られており、肯定的に評価されていた。とくに、ヘンダーソンはパレートを高く評価していた。そして残りの二人は、ハーヴァードにおける知名度は前二者に比べれば、高くはなかったかもしれないが、傑出した社会学的仕事をなしとげていた。著名度と実質性をバランスよく組合せたということであろうか。とくに、パレートは『構造』中で絶賛

されているにもかかわらず、パーソンズの中期以降にはそれほど言及されなくなることを考慮すると、パレートの知名度またヘンダーソンの影響力が選択に作用した可能性を否定できない。

パーソンズによるデュルケムとウェーバーの解釈について、カミックがコメントしているので、それを引用しておく。

デュルケムの初期の著作の主なねらいが、生物学的な実証主義へと傾いてゆきつつあった功利主義を批判することであったとパーソンズは解釈しているが、これは正しくない。また、彼の後期の著作が、行為理論と価値要因に関心を寄せていると描くことで、結果的にデュルケムの行った分析の中の制度的な要素をほとんど見落としてしまった。同時に、経済的かつ政治的な構造の議論も、また、相互作用と統合の集約的なパターンの中で、規範的な諸要素が発生するという議論も、パーソンズは十分に生かしきることができなかった (Camic 1989 : 60)。

『構造』におけるウェーバー解釈の問題点は、よく指摘されるように、規範的カテゴリーを強調しすぎて、その結果、ウェーバー社会学のごく一部分にすぎないものを、ほとんどそれが全体であるかのように描いてしまった。とくに、彼の「社会的行為の諸類型」「正当的な秩序」などを、すべて規範的要素のヴァリエーションとみなし、規範的要素に還元してしまった。また、文化的な信念（あるいは信仰）やそれらが社会内において示す多様性についての彼の分析を、社会統合の説明、共有された価値を通じた社会統合の説明へと変形してしまった。さらに、ウェーバーの宗教社会学的な著作ばかりをとりあげ、その他の彼の経済的・政治的な著作を無視した。これらのことはすでに多くの人々が指摘している (Camic 1989 : 61)。

パーソンズは、ウェーバーもデュルケムも、社会秩序の問題、つまり、利害を求めて行為する行為者の間に、秩序がいかにして可能なのかという一般的な問題にとらえられていた、というポートレートを描いてしまった。しかし、彼ら二人にとって、それが中心的な問題というわけではなかった。彼らが当時どのような問題にとり組んでいたのかは、その時代の社会的、歴史的、知的、制度的なコンテクストを検討する必要がある<sup>40)</sup>。しかし、パーソンズは彼のとりあげた思想家たちに、そのような分析を試みてはいない。ウェーバーとデュルケムとでは、その方法もテーマの内容もまったく異なる。このことは、ベンディクス以来さまざまな人々が指摘している (Camic 1989 : 61)。

以上のごとく、パーソンズの収斂テーゼにはかなりの無理がある。ではなぜパーソンズは、そのような収斂テーゼを物語る必要があったのだろうか。カミックは以下の二点をあげて、この疑問に答えている。第一に、パーソンズは経済学の方法にひきつけられたにもかかわらず、経済学からは社会学に対する好意的なサポートを必ずしも受けることができなかった。このような社会学にとって不利な状況は、古典派・新古典派の経済学に対して

自分の意見を対抗させる（功利主義はディレンマを抱えているから、その立場は不安定である、という見解など）だけでは、覆すことができないとパーソンズは考えた。そこで、ヨーロッパの名声の確立した思想家たちの、より現代的な遺産にアピールして、自分の考えを権威づけようとした（Camic 1989 : 54）。

第二に、社会学の歴史は、本当の科学の進歩なのだということ、それは少し手を広げて研究してみればわかることなのだ、ということパーソンズは論証しようとした。それが彼のチャーターにとって必要だった。当時のパーソンズが置かれていた状況は次のようなものだった。社会学者の数と同じほど、社会学理論のシステムがある。社会学には理論のまとまりに欠けるところがある。社会学には共通の基盤がなく、恣意的で主観的である、という評価が彼の周囲で語られることがあった。これはパーソンズにとっては、社会学に対する攻撃であった。社会学とは科学ではなく、芸術なのだ、科学としてのチャーターが与えられるようなディシプリンではないといわんばかりの攻撃であった。パーソンズはこのような通念を根絶する必要がある。その目的のために、『構造』は、社会学における科学的な指向が発展してきたその過程の研究を行った。社会学理論というものは、真の科学が発展してきたのとちょうど同じような道をたどってきているのだということ論証しようとした。つまり、理論と事実の相互作用からはじまって、その産物は、所与のリアリティのある側面についての可能な知識の全体に、次第に近づいてゆくものである。収斂テーゼとは、パーソンズにとってこのことの決定的な証明であった（Camic 1989 : 61-62）。

収斂テーゼを柱として、パーソンズが描く社会学の歴史は、彼のプロジェクトにとって都合のよいように語られた筋書きであった。その筋書きの結論は、『構造』の末尾に示された次のような言葉である。「……われわれの科学である社会学に何ら恥じるところはない。僅か一世代という短い期間に、経験〔研究〕と理論の双方においてめざましい進歩が成し遂げられた。われわれは、いまや〔社会学〕建設のための正しい理論的基盤をこの手中に収めている」（SSA : 775 = 第5分冊1989 : 200）（〔 〕でくくった部分は、翻訳者がおぎなつたもの）。

パーソンズはこのような観点から、社会学の歴史を扱っているため、一般的に、収斂の反対方向つまり多様な方向へ広がるような動きや、また、科学的進歩を積極的には主張しないような学派は、彼の歴史的議論からは排除されている。たとえば、現象学的な思考方法は、自然科学の方法と大きく異なるゆえに、また、歴史主義的な思想家も、普遍的な法則を認めないという理由で除外されたのだろう（Camic 1989 : 59 n.16）。また、本章4節でもふれたように、1920年代から1930年代のアメリカでは主意主義的な行為者観を表明する研究者は少なくなかった（たとえばズナニエツキ）にもかかわらず、パーソンズの描く社会学の歴史はもっぱらヨーロッパを舞台にしている。この理由についてカミックは特に述べていないが、威光を利用するためには、アメリカよりもヨーロッパの研究者の方が

都合がよかったのであろう。また、調査研究よりも理論研究を先行させるという戦略、概念図式の相違などの副次的な問題が関係してくることを避けるためもあったのかもしれない<sup>41)</sup>。

いずれにしてもカミックによれば、パーソンズは、当時夢中になっていた論戦の見地から、遡って社会学の伝統を解釈したのである。ここでも、ある限定されたコンテキストにおいて作り出されたものを、一般化するということが、再度行われている。自分の戦いにとって都合のよいものだけをとり出して、それがあたかも社会学理論のすべてであるかのように一般化している。しかし、それはチャーターという形式のもつ限界でもある、とカミックは指摘している (Camic 1989 : 62-63)。

収斂テーゼは、反面、その後の社会学研究にとってプラスの影響を与えたという側面もある。とくにウェーバーとデュルケムに関しては、パーソンズは、アメリカの初期の社会学者よりも、厳密に文献学的な解釈を行ない、また、それまではそれぞれの学派の中に属しているだけで、相互に遮断されていた (ウェーバーやデュルケムなどの) 思想家たちの作品の間にダイアログする道をきりひらいた。その意味では、『構造』に描かれた社会学の歴史は、後々の社会的イマジネーションにとって、持続する一つの源泉になった、とカミックは評価している (Camic 1989 : 60)。

## 2. 9 カミックの初期パーソンズ像 — コスモポリタン・ローカリズム —

以上8節にわたって、『構造』についてのカミックの見解を解説した。本節では、『構造』を中心とするカミックの初期パーソンズ像を、以下の三点にまとめておこう。

### (1) 古典としての『構造』

『構造』は現在もなお重要な書物である。この本がとりあげた諸テーマ、社会秩序の基礎、行為と社会体系の関係、社会科学の方法論、デュルケムやウェーバーという古典のもつ現代的な意味、これらは今でも社会学者の中で議論になる諸テーマである。『構造』はそのような議論の原形の一つを提供した。その意味で『構造』は、社会学の理論的伝統における一つの古典の地位を占めている。『構造』は、一本の太い議論の線を描くことに徹底していて、いろいろな問題 (カミックによれば、一つ一つの問題そのものは当時すでに先行研究者たちによって論じられていたものであったという) を次から次へと議論していく。その議論のくり出し方やつなぎ方にはパーソンズの工夫がこらされている<sup>42)</sup>。その結果まとめられるパノラミックな議論の全体像、おそらくこれらすべての過程の全体に『構造』の魅力が潜んでいるのだろう。その意味で、『構造』は社会学の理論的な論理の組み立て方の偉大な見本の一つである。この本を理解すると、理論を組み立てる方法や、理論を支える基礎となるもののことや、理論の限界について、よくわかるようになる。そういう意味

で、『構造』という本の意義は今日もなお認められる、とカミックは考えている (Camic 1989 : 94)。

### (2) 社会学を確立するという目的

カミックによれば、『構造』は、社会学を確立するという明確な目的に沿って書かれた。すべての構成がそれにふさわしいように作られている。中心的な役割を担うのは、規範的な領域であり、その上に社会学が成立する。その意味では、冷静に書かれた、時代を超越した社会理論ではなく、むしろ時代に深く関わって書かれた、時代の影響を強く受けて書かれた著作である。当時の社会学というディシプリンは、まわりのより強力な制度的ライヴァルたちの中であって、まだ孵化したばかりの科学であり、パーリアな状態に甘んじていて、研究領域について侵入されたり非難されたりもしていた。パーソンズの目的は、そういう状態から社会学を永久に解放するような包括的なチャーターをつくることであった。『構造』は規範的な領域が存在するということの宣言であり、その領域に対して社会学が権利をもっていることの宣言でもあった。社会学は『構造』の中で、いろいろなものを受け取っていく。たとえば、身を守るための方法、自分たちの有名な御先祖たち、分析的な準拠枠、社会構造やパーソナリティについての適切な概念化、差し迫った経験的な問題、そしてまた自己を正当化するプロト哲学的な論理などである (Camic 1989 : 94-95)。

### (3) 初期パーソンズに対する批判

カミックは次のようにいう。『構造』はチャーターとしては優れているが、ある特定の定式化を、唯一の正当な可能性だと主張してしまっている (あるいはそう受け取れる) のが、そこに書かれている社会学理論の限界である。このチャーターを作った人の論理は、今日からみれば、いろいろなところにひびが入っている。個々のトピックについてカミックが指摘する限界は、すでに論じたからここでは繰り返さない。より一般的に言えば、『構造』は、たとえば、行為の理論を提供しているが、社会歴史的差異に関心をもつという観点からの行為の社会学を、提供してはいない。過去の社会理論の議論はあるが、それらがどのように出現し、成長し、変化したかという、そのプロセスに対する社会学的分析はない。行為者の普遍化された概念はあるが、パーソナリティの形式が歴史的にどういう変化をするか、という社会学的モデルは提供されていない。社会秩序についての一般化された議論はあるが、異なったいろいろな場所において、その問題の異なった解決の仕方があるかどうか、という社会学的検討がない (Camic 1983 : 95)。

カミックは1991年の論文で、彼が批判的にとらえているパーソンズのそのような傾向を「コスモポリタン・ローカリズム」(cosmopolitan localism) と呼んでいる (本章4節注27でもすでにふれた)。その意味は、「ある人の身近な知的コンテキストから発生した問題やイシューに対して、一般的な——世界史的な、とまではいわないとしても——意義を与える態度のこと」と定義されている。具体的に説明すると、以下のような意味で使われて

いる。初期パーソンズにとっての問題とそれに立向かうための道具は、概して、ローカルなエスタブリッシュメントから供給された（たとえば、アマースト大学の制度学派、LSEやハイデルベルグの社会科学、ハーヴァードの経済学や科学哲学、社会科学の役割と行動主義をめぐる当時の論争、社会学の制度化をめざすたたかいなど）。若きパーソンズは身の回りの諸ディシプリンで議論されている大きな 이슈を注意深く受けとめ、相互に離れたところで論じられている諸観念が潜在的にもっている関係を見抜くことにすぐれていた。そして、彼自身が直面した諸問題に対しても、来るべき知的総合に向けて並はずれた働きをみせ、また、身近にある道具を用いて、既存の知的問題に対してオリジナルなアプローチを作り出すことにすぐれていた。けれども、パーソンズは、大戦間の国際的な知的センターで学んだせいもあって、ローカルなものに、コスモポリタンな<sup>43)</sup>重要性をすぐに与えるという傾向があった。だいたい1930年代半ばまでには、局地的に行われている論争から、普遍的な平面へと飛躍することをパーソンズは当然のこととみなすようになっていた。以上の点が、カミックによる初期パーソンズ批判のポイントである（Camic 1991 : lxvii-lxviii）。

#### （4）カミックの見解に対する筆者のコメント

カミックの方法は明快であり、彼の提示するパーソンズ像、また彼の整理によるパーソンズの諸問題や諸概念はきわめてわかりやすくなっている。

しかし、カミックの方法全体についてのコメントは本節では控えることにして、ここではもっとしぼった論点について筆者の立場から批判的にコメントしたい。論点は二つあり、一つは、「コスモポリタン・ローカリズム」の問題であり、他の一つは、パーソンズはなぜ社会学を専門領域としたのか、というパーソンズ社会学の内発的形成のプロセスに関する問題である。

第一に、「コスモポリタン・ローカリズム」あるいは「過度の一般化」という批判は、「行為」「秩序問題」「主意主義的行為者観」「収斂テーゼ」などの節でもたびたび繰り返されてきた、カミックによるパーソンズ批判の基本点である。カミックの主張は、たとえば行為を例にとると、手段-目的関係が明確になっている行為もあるだろうが、しかし習慣のような行為は、そのような関係が明確でないので、パーソンズの図式からはオミットされてしまう。それにもかかわらず、パーソンズの行為図式は、(古典力学とのアナロジーに示されているように) 行為の本質的なものをすべて取り込んでいるから、その図式が適用できない行為はないかのごとく、主張されている。このような主張は、パーソンズの方法論の言葉で表現すれば、「分析的要素」が他にもありうるのに（たとえば「習慣」）、「目的」と「手段」の要素しかとりあげられていない、ということになるか<sup>44)</sup>。

パーソンズは彼が提出する分析的理論が三重の抽象に基づいている、と指摘している。準拠枠の適用によって構成される事実、全体から切り離された単位、選択された変数、と

いう三重の抽象の産物として、分析的理論があるという意味である(溝部 1999:146-147注27)。

歴史的具体的な差異の研究に役立つような理論が望ましい理論であるというカミックの基本見解は、それなりに一つの見解ではあるが、パーソンズ理論は過度の一般化を行ったという批判は、半分はあっているが、半分は見当ちがいではないだろうか。というのは、分析的理論の「抽象性」という主張は、この分析的理論が唯一のものだと断定しているのではない、と注意を与えていることと同じと考えられるからである。カミックの論文の中では、チャーターの性格として過度の一般化が生じたが、しかし、パーソンズはそのことにも気づいていたとしても文中には明記することができなかつたのだ、という説明が示唆されていた。しかし、パーソンズなら、(同じことのいいかえだが)多様性を捨象したところに(あるいは、捨象せざるをえないところに)、『構造』あるいは「チャーター」の本質があると答えるかもしれない。パーソンズは「分析的理論の抽象性」という言葉で、(チャーターを書くという使命のために)ある限度をこえるような多様性は捨ててかかっているということを、注意しなかつたのだという解釈も可能であろう。

なぜ多様性をすくいとることを捨てていたかということ、一つの一般化された理論〔ないし概念図式〕と一つのディシプリンが対応する、二つ以上の一般化された理論が一つのディシプリンの中に同居することはできない、という原則が、パーソンズのチャーターの基本に据えられていたように思われるからである。というのは、一つのディシプリンには一つの一般化された理論が対応するという原則をもし崩すならば、たとえば、経済学があれば他の社会科学はいらないということにもなりかねないからである。以上の点は、カミックがそのように述べているというのではなく、カミックの示唆を徹底させるとそのように考えられるということである。

しかし、一つの一般化された理論によって、カミックが期待するような現実の多様性をフォローすることはどだい無理な話である。

理論の抽象性に関して、新古典派経済学からの導入物という視点のみを強調して、カミックは(パーソンズが暗々裡に伝達しようとしている)このような実質的な意味を軽視しがちなのではあるまいか。このように考えると、カミックのいう「過度の一般化」のすべての責任をパーソンズに帰するのは少々酷なのではないだろうか。半分くらいの責任は、「分析的理論の抽象性」という注意書きを忘れ、あるいはまた、(カミックは対案を示しているが)対案を明確にせずに(いわば非参加的な態度で)、『構造』を読んできたわれわれ読者の側にもあるように思われる。

「コスモポリタン・ローカリズム」という言葉の後半部(ローカリズム)については、カミックの「社会的知的コンテクスト分析」という方法に従えば、どうしてもローカルなものがクローズ・アップされがちになるのではないか。ローカルなものが前面に出てくる

傾向は、カミックの方法から当然生じてくる分析結果であろう。これがカミックの方法の新しさでもあり、逆にいえば、限界にもなりかねない点であると思う。

「コスモポリタン・ローカリズム」あるいは「過度の一般化」は、アレグザンダの「科学的連続体」における、より経験的レベルとより形而上学的レベルの「混同」と重なる部分もあると思われる。しかし、それだけではなく、すでに指摘したように「分析的要素」の選択の問題と重なる部分もあるようだ。

また、盛山和夫の擬似二次理論化の問題（実際にはその理論家がよってたつ社会的立場からみた客観性のレベルにとどまっているにもかかわらず、どのような現実の社会的立場にもとられない視点からの客観性をもつと自称する理論のこと）（盛山 1995：213）と少し似ているところもあるが、盛山の一次理論と二次理論の区別と、ローカルと普遍の区別とは重なるのではなく、交差するものかもしれない。

第二の問題点は、パーソンズはなぜ社会学者になったのか、という問いである。カミックの1989年論文では、コリンズらの説を引用して、自分の職業的地位のチャンスの拡大を求めて、パーソンズは経済学科から社会学科へと移籍した、という説明が示唆されている<sup>45)</sup>。また、1991年論文では、「この頃までに(1930年代の半ば——引用者)、……彼の職業は社会学者となった(Parsons had become, as he says, “a sociologist by profession”)、と彼自身述べている」とさりげなく書かれている<sup>46)</sup>。

社会学者になろう、というパーソンズの内発的動機がどのように形成されたのか、という問題にカミックはあまり関心がないのか、あるいは、そのようなプロセスはパーソンズの場合とくに存在しなかったと考えているかのようである<sup>47)</sup>。あるいはまた、社会学者ということではなく、社会科学の研究者（あるいは経済学者）への指向というとらえ方をしているのかもしれない。

また、カミックは、「アメリカのアカデミック・シーンが拡大状況にあったこととパーソンズ自身のキャリアの軌跡が重なっていた」と述べ、学部時代には生物学から始めて、大学院では経済学を専攻し、ハーヴァードの一流学科である経済学のインストラクターとなり、そこでは昇進の見込みが薄かったが、『構造』執筆の時期に、低い地位にあった社会学科のぱっとしないポジションに移った」と指摘している（Camic 1989：44-45）。

カミックの描くパーソンズ像は、このように、内発的な問題意識をもって社会学へとたどりつくというイメージではなく、拡大・膨張していくアメリカのアカデミック・シーンの波にのって動いていくパーソンズ、というイメージが強いようである。このイメージは、アレグザンダのパーソンズ像とは顕著に異なっている。カミックのパーソンズ像を、パーソンズの脱神話化の徹底と読むか、それとも、「コスモポリタン・ローカリズム」という形容のある部分でカミックが強調しているように、パーソンズの研究者としての特質の一つ——どこにいても時代の知的動向に鋭敏で素直な耳をもっていた——を、うまく表現し

ているとみるか、見方はわかるだろう。

1989年論文の末尾をカミックは次のような、古代の警句を借りた言葉で締めくくっている。「キツネは多くのことを知っている。しかし、ヤマアラシは一つの大きなことを知っている。」カミックは、パーソンズをヤマアラシにたとえており、規範的諸要素の科学を一般的に防衛する任務を果すべく呼び出されたヤマアラシである、というパーソンズ像を描いている。

けれども、この「ヤマアラシ」は、カミックが推測するように、内発的な社会学的問題形成のプロセスぬきに社会学的「ヤマアラシ」にまでどうやって成長したのか、カミックのいうように、アカデミック・シーンの拡大に乗ったという説明だけでは不十分ではないのか、やや疑問の残るところである。(筆者の見解の一端は、本稿28頁を参照のこと。)

### 3 二つの研究スタイルの特徴

「はじめに」のところで述べたように、本稿の目的は、カミックの『構造』を中心とする初期パーソンズ論を紹介することにあつた。カミックの議論の特徴が明確になるように、アレグザンダのパーソンズ論を参照しておいた。しかし、筆者の能力上の制約から、アレグザンダのパーソンズ論の一部にしか言及できなかった。そのようなわけで、二人のパーソンズ論を十分に比較することはできなかったかもしれないが、最後に、二人の研究スタイルの特徴をまとめておこう。

パーソンズを読み解くために、二人とも、工夫をこらした概念装置や独創的アイデアを用意した上で、パーソンズの諸問題を再構成している。

カミックの「チャーターとしての『構造』」というアイデアは、きわめて独創的であり、かりに「チャーター」という言葉を使わないとしても、社会学を他の先行諸科学と何ら変わるところのない科学として、とくに経済学の隣りに確立するという目的に沿って、『構造』が書かれたという説は、やはり一つの卓見であろうと思う。アレグザンダによると、パーソンズにも曖昧な点や誤謬があるということだし、またカミックによれば、『構造』にはひびわれが多く見られるという。曖昧さ・誤謬・ひびわれは、なぜ生じたのだろうか。アレグザンダによれば、パーソンズは自分自身を誤解することがあったからということになるし、またカミックなら、上記の目的に沿うため、あるいはポレミックな効果を増幅させるために、あるいはまた単に急いだために、ということになるだろう。

たとえば、ウェーバーは価値観の多様性を理由に、社会学における科学的知識の累積的發展には懐疑的であった。パーソンズはウェーバーのその見解を知りつつ、価値観は限られた数しかないという前提を置くことを示唆しつつ、社会学における楽観的な進歩の見通しを述べている。

「……科学における相対主義という要素が、懐疑的な帰結にいきつくべきでないとするならば、こうした意味でありうる視点〔価値観点のこと〕の数は限定されていると前提する必要がある。価値経験〔価値観点のことか?〕の蓄積に従って、知識の総体は漸近線〔的にリアリティの総体〕に近づく」(SSA:756=第5分冊 1989:174) (訳文には、引用者が手を加えた部分がある)。

この引用文に示されているように、パーソンズはウェーバーの見解を至極あっさりとは否定することを示唆するのである。カミックの解釈を知るまでは、筆者は不思議でならなかった。問題の重みに比べると、論証がほとんどなされていないのはいかにもバランスを欠いている。結論は、あまりに楽観的すぎる……等々。答えはみつからないものの、結局、パーソンズはそういう楽観的な見方を好む人なのだ、論証するのはやっかいだから仮定形であっさりとは表現して通り過ぎようとしているのだろう、などと、パーソンズの気質に帰するような解釈をしていた。しかし、カミックのアイデアを知った上で考えると、ディシプリンとしての立場を考えて、ウェーバーの価値観点の多様性の議論には深入りしないように配慮したのだ、と今回改めて納得がいった。

このように、パーソンズが当時、社会学の内側だけで思考していたのではなく、アカデミズム内部での地位関係をふまえつつ、社会学の利害をも考えながら——社会学のディシプリンとしての利害という点に筆者はこれまでまったく気づかなかった——、『構造』を書いたのだ、というカミックの説は、上述のような不可解さを、かなりの程度、読みといてくれるのではないだろうか。今後、初期パーソンズあるいはパーソンズの全体像について再考が必要になるかもしれない。

このような読みときが可能になったのは、なぜだろうか。一つには、社会学史の分野に新しい気運がおこってきたということもあろうが、ここではカミック一人の議論を対象をしばっておきたい。カミックの研究者としての基本的指向は、経験的な研究を比較的重視するタイプであるように感じられる。歴史的多様性をすくい取るという主張や、「行為の社会学」という提案を考えあわせると、カミック自身は、「理論前提」レヴェルの理論ではなく、検証可能な命題からなる理論、あるいは経験的研究の道具になるような概念図式を重視する、そういう理論観をもっている研究者ではないかと推測される。経験的指向性を強くもつ研究者が、古典的理論的著作に的をしばって、その発生、成長のプロセスを、大胆な推測を交えつつ経験的に跡づける。つまり、経験的歴史的磁場の中で、理論的著作をとりあげる——この試みが、これまでにない新しい視角を生み出したといえるのではなからうか。

カミックの「社会的知的コンテクスト分析」によれば、世界各地で、それぞれ独自の社会学の生成・確立・展開についての物語りがあるかもしれないと予想される。

それに対して、アレグザンダのパーソンズ研究は、理論指向の強い研究者によるパー

ソーンズ研究の一典型例といえよう。アレグザンダ自身ポスト実証主義の立場から、「科学的連続体」という工夫を持ち込んで、パーソンズの社会理論を分析し、将来に向けてポジティブなもの（多次元的思考、巨匠との対話の重視など）をそこから引き出そうと努力している。その意味では、パーソンズと似た者同士という印象がアレグザンダにはつきまわっている。

その点、カミックスの場合は、彼のパーソンズ批判にみられる通り、パーソンズの見えないところ、彼が捨てているところから、ポジティブなものを引き出そうとしている。これもパーソンズというグランド・セオリストと経験主義的指向の強い研究者という組み合わせの面白さから生じているのではなかろうか。カミックスのいう「コスモポリタン・ローカリズム」という評価は、おそらく、コスモポリタニズムとローカリズムの間（あわい）にこそ、ポジティブなものの源泉があるというカミックスの洞察から生みだされたものであろう。

カミックスに対する筆者の批判は、第2章9節で述べたのでくり返さないが、その他には、『構造』は社会学の利害を守るという目的に沿って書かれたという説明は、面白いが過度の単純化であるという批判がありうるだろう。その場合には、パーソンズのそれまでの研究の成果を主体としつつ、社会学の利害も考えてアレンジした、という程度の説明に修正することも可能であろう。いずれにしても、『構造』はある時代のあるコンテクストとの深い関わりをもっているというのが、カミックスの結論であるとすれば、中期以降のパーソンズの著作と時代との関わりはどうか、今後検討されてしかるべきテーマであろう<sup>48)</sup>。

カミックスの過度の単純化を免れようとするならば、やはりアレグザンダがフォローしているような、パーソンズ理論のポジティブな側面を前面に出すのがよいだろう。複雑な思想や新しいディシプリンが立ち上がる時には、むしろ、いろいろなモチーフやきっかけが輻輳していたかもしれない、という見方もありうるだろう。その意味では、カミックスとアレグザンダの見解は、相互になじまないように見えるが、上に述べたような「輻輳説」<sup>49)</sup>という立場からみれば、必ずしも、相互に非両立な見解であるという必要はないと思う。

『構造』がなぜあのような形でまとめられたかという問題を考えるとき、カミックスの視点もアレグザンダの視点も、相互に相補的な関係にあるとみた方が、パーソンズ解釈のヴァリエーションをふやす意味で、社会学史的研究にとってはプラスであろう。カミックスとアレグザンダの研究方法は、相当異なっている<sup>50)</sup>。しかし、両者ともに豊富な先行研究をよく整理し活用していることには頭が下がる思いがするし、また、パーソンズ研究を進める上での困難は、研究者側の誤解やイデオロギー的偏見などのほかに、パーソンズ理論そのものもつ多義性や矛盾という内在的な問題にも根差している場合があることを、彼らは一致して認めている。その意味では、パーソンズの「脱神話化」は時代とともに進行しているようだ。この20～30年のうちに、パーソンズ読解の水準はやはり高くなっている

のだろう<sup>51)</sup>。

振り返ってみれば、『構造』の中のパーソンズによる社会学の定義、それをめぐるアレグザンダーとカミックの解釈を検討する途上で、いくつかの種類社会学の定義が姿をあらわしていたように思われる。それらはたとえば、社会科学を何らかの意味で包括するような「スーパー社会科学」として社会学、社会科学全体を展望しつつ、各個別科学及び自分自身の領域をも位置づけようとする社会学、(パーソンズ社会学を論じる際には直接関係することは少ないが)社会科学全体の見取り図には比較的無関心な、何らかの意味で独自の領域をもつ個別科学として社会学などである。今日のわれわれにとっても、社会学をどう定義するかという問題は、今なお多様な答えがありうる問題であり続けている。

『構造』は社会科学における仕事のわりふりを社会学に委ねたという意味のことをカミックがいつている(第2章7節参照)。筆者の考え(あるいは願望)は、このカミックの観察を若干修正したものに近いかもしれない。時代の変化と共に、新しい種類の社会現象が出現するだろう。その時、既存のディシプリンがそれを研究対象にすることができないならば、後発科学である社会学が(場合によっては文化人類学も)、その新しい現象を研究対象にすることを、またそれに伴う新しい方法の洗練を、引き受けることになるだろう。その意味では、社会学が(友枝のいう)「残余社会科学」の地位を脱しきれていないのは確かであろう。おそらくこの傾向は、大学の社会科学系学部が膨張をとげて(当然のことながら予算の増大とともに)、新しい未知の後発科学が誕生するまで(あるいは、社会学がもっと膨張して、社会学の下位領域が制度的に確立したテリトリーをもつまで)続くだろう。もっともそのような時期が到来することよりも、既存のディシプリンが協力して、新しい社会現象を研究するという態勢を組むような時代の到来を予想する方が現実的かもしれない。そのような態勢をさす言葉として、最近では「マルチディシプリナリー」という言葉を耳にすることもある。そのようなマルチディシプリナリーな状況において、各ディシプリン間の協力の音頭をとる「音頭取り」の役目を社会学が引き受けてもよいのではないか、というのが筆者のひそかな予測である。

社会学はどのような分野を担当するディシプリンなのか、という問題はパーソンズ自身もかなりてこずった問題である。彼の本音の関心は、第1章3節注11に引用したように、広く「人間行為一般」に向けられていたと考えるのが、妥当かもしれない。こう考えたとしても、カミックからもアレグザンダーからもさして強い異論は出ないだろう。問題は、価値要因の扱いをめぐって生ずることになる。カミックによれば、結局は、価値的あるいは規範的領域をパーソンズはとりわけ重視していたということになるし、さらに、これが「社会的なもの」の究極的な源泉であるという考えをパーソンズはもっていたのではないかとさえ疑っている。

これに対して、アレグザンダーの考えによれば、パーソンズ社会学の本領は多次元的思想

考であり、その具体的な概念装置はインターチェンジ・モデルである。価値のみをとくに重視していたとすれば、それはパーソンズの混乱であるということになる。

筆者の私見は次の通りである。たしかにアレグザンダのいう通りであると思うけれども、しかし、価値要因を偏重する傾向をパーソンズがもっていたことも、やはり事実として認めなければならないだろう。次の問題としては、パーソンズにおいて、このような価値要因偏重がなぜ生じたのか、という問題である。

カミックの1989年論文の考えに従えば、社会学のニッチを確保しつづけようとするれば、それしか選択の余地はなかったということになる。しかし、第2章9節(4)でもふれたように、パーソンズの社会学的問題思考の形成プロセスの中にもその理由を探す必要があるように思われる。この点は、カミックもアレグザンダも手をつけていない問題として残っている。

最後になったが、二人の研究スタイルを単純化して要約しておこう。カミックはおそらく経験的多様性を重んじる研究者タイプであり、その意味では当然のことながら、パーソンズの理論は偏って見えるのであろう。その偏りを指摘するのに優れたパーソンズ研究者であると思う。

アレグザンダは一般化されたレベルでの多次元性を重視する研究者であり、それがパーソンズの理論の中にあると指摘している。パーソンズとよく似た資質を持っており、パーソンズのよさを引き出すのに適した研究者であろう。

カミックの描くパーソンズ像は、これまでの研究者のものとは大きく異なっているために、かなり刺激的であるかもしれない。アカデミック・シーンの拡大に乗りつつ、社会学の利害を目ざとくかぎつけて理論を構成する、抜け目のない風見鶏的な研究者のイメージか、それとも、社会学理論の伝統や新しい方法論に成熟した知見をもちながらも、あえて社会学の利害をも配慮しつつ、(生来といってよいかもしれないほどのスーパー社会科学的な指向をたわめてまで、個別科学の枠内に社会学を収めつつ) 理論構成に立向う器の大きな研究者というイメージか(カミック自身二つのイメージの間を揺れているのかもしれない)。さて、読者はどちらのイメージを支持するだろうか<sup>52)</sup>。

## 謝辞

手書きの原稿をワープロに入力する作業のために、また腱鞘炎や疲労のために筆者の右腕が不調であった時期に、多くの学部学生諸君のお世話になった。植田正和、鈴木伸次郎、上村彰吾、田中朗、大場淳一、柳原千香、大塚祐介、山本香織、平真由子、藤永太郎君たちどうもありがとう。また、本稿の英語題名については、津島昌寛、俵希實さんに相談相手になっていただいた。感謝する。

## 注

- 1) Alexanderというネームの日本語表記は、本稿では高城(1992)に従って、「アレグザンダ」とする。ただし、鈴木健之編訳(1996)では、「アレキサンダー」と表記されている。鈴木編訳を本稿で引用するときは、「アレキサンダー」とする。
- 2) 「分析的リアリズム」の内容については、本稿第2章6節および溝部(1999:146-147)を参照のこと。
- 3) 筆者はこの問題について、かつて次のような解釈を示したことがある。パーソンズの中心的な問題関心は全体社会レベルのトータルな社会論——たとえばマルクスの階級論的な社会論、また、ウェーバーの官僚制による鉄の檻という社会論など——に向けられており、それらの社会論には適切どころもあるが、そうでないところもある、そういう部分否定をするために導入された方法論が「分析的リアリズム」である、という解釈である(溝部 1999:137)。

しかし、この解釈の資料的裏付けは十分というわけではなく、やはり「分析的リアリズム」という方法がどのようにして形成されたのか、という問題は一つの謎として残っている。

- 4) 『構造』だけに限っても、多義的あるいは曖昧な用法の目立つ概念はこの他にも少なくない。「経験主義」という概念のパーソンズに独自の使い方は、主なものでも4種類はあり(溝部 1999:148-149 注34)、また「規範的」という用語の意味も、大別して4種類あるという(Camic 1989:66)。「秩序問題」についても、その問題の意味が不明確だという意見もある(盛山 1995:38ff.)。
- 5) パーソンズ研究の中ではこれまで、イデオロギー的批判と理論モデルに対する批判が錯綜する傾向があった。アレグザンダの方法は、この傾向に対する一つの対応策であり、高く評価できる。彼の1983年の著作をみる限り、この方法は最後まで貫き通されている。
- 6) 本稿で引用した四つのレベルのうち、②のレベルは、序文の図1には明示されていない。また、序文の図1には、(理論——引用者)モデル(例、機能主義モデル、インターチェンジ・モデルなど)のレベルが「理論前提」レベルのすぐ隣に示されているが、引用した四レベルでは省略されている、などの違いがある。

なお、「科学的連続体」についての同様に簡略化された説明は、アレクサンダー(1996:56)にも見出される。「理論前提」という訳語は、アレクサンダー(1996)の編訳者鈴木健之のものを踏襲した。

- 7) 混同(conflation)の例をあげておこう。『構造』において功利主義は、(合理性の規範のみを認める)「合理主義」という誤りと「実証主義」という誤りを同時におかしたとパーソンズによって批判されている。しかしアレグザンダによると、「実証主義」は方法論レベルの概念であり、他方「合理主義」は理論前提レベルの概念であるので、区別されるべきであるという。しかるにパーソンズは、これら二つの概念が必然的に結びつくと思われ、受け取れる議論を展開しており、これはレベルの混同であるとアレグザンダは批判している(Alexander 1983:16)。

しかし、一見すると理解しにくい「混同」概念の使い方もある。例えば、パーソンズが社会学の焦点がどこにあるかを定義するとき、アレグザンダによると、彼は「混同」のエラーをおかすことがあるという。どういうエラーなのかわかりにくいところがあるが、アレグザンダによると、パーソンズの「理論前提」は「多次元性」であるが、にもかかわらず、「社会学的理念主義」(sociological idealism)の傾向が他を圧倒して突出してしまうことが、パーソンズの場合、しばしばあった。つまり、価値要素を偏重するという傾向である。これは、理論(レベル)と方法(レベル)の混同である、とアレグザンダは批判している(Alexander 1983:272-273)。

この批判的議論に続いて、アレグザンダはパーソンズによる社会学の定義の仕方の問題に移る。(アレグザンダは、「中間的セクター」における創発特性と各個別社会科学を対応させるというパーソンズの発想を承認していないようだ。この点は、カミックと異なる。第2章7節参照。)アレグザンダによると、『構造』では社会学の焦点は「共通価値統合」に置かれ、中期の初めには、社会学は「(価値パターンの具体化としての)制度の科学」と定義され、『社会体系論』においては、「共有価値パターンの内面化」が社会学の焦点をなすと定義され、そして後期においては、社会システムの統合サブシステムである「社会共同体」(societal community)を、およびこの連帯コミュニティがより一般的な価値を制度化する方

法を、研究する科学が社会学であると定義される。しかし、このように社会学というディシプリンを、たとえば連帯を研究対象にする科学というふうに定義することは、(価値要素偏重という傾向のあらわれであるから——引用者) 混同であり、一種の「最後の頼みの綱」(last resort) 的な議論である、とアレグザンダは述べている (Alexander 1983 : 273-274)。

- 8) 「多次元性」の問題からは離れることになるが、アレグザンダのパーソンズ解釈において、キリスト教的あるいはプロテスタント的要素がしばしば引き合いに出される。これはカミックの解釈と比較すると、アレグザンダの解釈の一特色となっている。これに関連して、アレグザンダのもう一つのパーソンズ像も引用しておこう。

資本主義社会の発展に反応して、大きな波が三回起ったが、そのうちの第三の波——プロテスタント的・モラリスティックな中産階級の保護主義的 (protectionist) な反応——の中に現われた傑出した代表的人物のひとりがパーソンズである、という解釈も可能であるとアレグザンダはいう (Alexander 1983 : 385-387 n.44)。

パーソンズのキリスト教的背景にふれておくと、彼の父は学者でもあったが、同時に会衆派の牧師でもあった。パーソンズ家の最初の入植者は、1670年以前にコネティカットにやって来たといわれている (高城 1992 : 9-11)。

- 9) この点に関して、アレグザンダは以下の文献を注であげている。パーソンズの1945年の論文 “The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology,” 及び、“ecumenicism” については、Martin U. Martel, 1971, “Academentia Praecox : The Aims, Merits, and Scope of Parsons’ Multisystematic Language Rebellion (1958-1968)” をあげている。

新しい教会をうち立てて、諸セクトを除去するというパーソンズの野心について、アレグザンダは、祭司と預言者を同時に兼ねることは不可能な仕事である、とコメントしている (Alexander 1983 : 152)。

また、エキュメニズム (諸教会の統一ということ) については高城 (1992) も言及し、とくに「地上における神の王国」の実現がパーソンズの目指すところであったという解釈を示している。「(パーソンズは) こうした観点から、『地上における神の王国』の建設にむけて、全力をあげて奮闘しつづけたのである」と高城は述べている (高城 1992 : 274)。

- 10) アレグザンダは、“analytical realism” という語を使うよりも、むしろ “analytic/concrete distinction” (Alexander 1983 : 43) や “the analytic and the concrete reference” (Alexander 1983 : 152) という表現を好んで使っているようだ。

アレグザンダは、マルクスの土台-上部構造という図式にふれながら、「社会秩序へのより分析的なアプローチを定式化することによって、パーソンズは、理論を作ることに対するそのような二分法的な、二元論的な拘束を、突破している」と述べている (Alexander 1983 : 85)。分析的アプローチは、たとえば、唯物論と観念論という二元論的思考を越えるためのもの、という評価である。

基礎的な科学方法論については、パーソンズ自身が混乱していたところもあると認めつつも、アレグザンダは、パーソンズのもつアンチ実証主義 (anti-positivism) あるいはアンチ経験主義 (anti-empiricism) の側面を強調している。パーソンズのアンチ実証主義的スタンスとは、「……いかなる経験的知識といえどもその意味および程度は様々だが、概念的に構成されていないものはない……」(SSA : 28=訳第一分冊 1976 : 54, Alexander 1983 : 10) などの言明の中に現われているとアレグザンダが解釈するもので、理論的議論は、実際には、事実の発見とは独立に生起する、という主張のことを指している (Alexander 1983 : 153)。この立場は、当時のホワイトヘッドの考え方などを基礎にしていたが、T. クーンや他のポスト実証主義者たちの立場を、パーソンズは約30年前に先取りしていた、とアレグザンダは高く評価している (Alexander 1983 : 152)。

しかし、パーソンズの方法論には、経験主義的分析へのコミットメントが持続して残り、このアンチ経験主義と経験主義の緊張は、最後まで解消されなかった。そのために、パーソンズの仕事のある部分が損なわれた、とアレグザンダはいう (Alexander 1983 : 153)。

さらに、パーソンズ自身が彼の仕事の本質を誤解していた、と彼は続ける。原則的にパーソンズは、自

分の仕事は、同時に経験的でありかつ理論的であり、一般的でありかつ特殊であるべきだと信じていた。しかし、彼は実際にはほとんど、(アレグザンダが提起した「科学的連続体」、本章2節で「理論のレベルわけ」という言葉で紹介したもののうち)より一般化された諸要素に集中している。しかしこれはまったく正当なことであった、とアレグザンダはコメントしている (Alexander 1983 : 155/157)。

このコメントからも推測できるように、アレグザンダ自身もこの立場(ポスト実証主義)にコミットしているようである。たとえば、アレグザンダが提案している科学的連続体のような基準によって、ある種のポスト実証主義な客観性が達成されうる、と述べているからである (Alexander 1983 : 309)。

これらの問題については、カミックも言及している。方法論に関するアレグザンダとカミックの見解は、かなり異なる。第2章6節を参照のこと。

11) 中野秀一郎は別の角度から次のように述べている。「……自分〔パーソンズ〕がここで語りたいことは実はもっと基本的な主題、人間の行為一般に関する説明の歴史なのだという。……パーソンズの社会理論はいわゆる社会学理論のスコープを大きく超える広がりをもっている」(中野 1999 : iii)。

12) 富永健一は、20世紀初頭にジンメルが社会を個人と個人の相互作用に分解して考えるという視点を創始したことをさして「マイクロ革命」という言葉を使っている。本文中のコリンズのものと言葉は同じだが、意味している期間は異なっている (富永 1995 : 13)。

13) 龍谷大学社会学部(瀬田キャンパス)の津島昌寛氏のご教示による。また、高城(1992 : 347)も参照のこと。

津島氏からは、アメリカ社会学会のニュース・レター *Footnotes*, 27(6), 1999を見せていただいた。それによると、カミックの近刊 *The Cosmopolitan Local: Talcott Parsons and the Making of an American Social Theorist* が予告されている。しかし、本稿作成中にはまだ刊行されていない。

14) 1992年論文では、社会的制度的コンテクストという用語が使われている。

15) カミックとジョーンズは1981年に一度論戦を戦わせている。カミックの功利主義に関する論文に対するコメントをジョーンズが書き、その中でカミックのいうことはもっともであるが、その古典の著作者以外の人の書いた書物にまで分析を広げることは、きりのないことである、社会学は19世紀以前にはほとんど存在しないので、19世紀以前にまで分析を広げる必要はない、とジョーンズはカミックを批判している。それに対してカミックは、それはどのような研究でも同じことで、たとえばコミュニティや階層システムが出現し成長し変化していくプロセスを研究するのと同じことである。対象領域がほとんどリミットレスであることは、どの領域でも同じことである、と反論している (Camic 1981 : 1141)。ジョーンズは「現在視点主義」(presentism)——現在の視点から古典を読もうとする立場——と「同時代視点主義」(antipresentism)——その古典の書かれた時代の視点に戻って古典を読もうとする立場——という概念の区別を提案している。カミックはジョーンズのこの区別を基本的に支持している。しかし、ジョーンズが過去の社会理論のある一部分や、著名な人のみに焦点をあわせて、その部分や人に集中するやり方をとっていることにカミックは反対している。なぜなら、ある社会理論が出現し、成長し、変化していくプロセスを理解するためには、ジョーンズのやり方では不十分で、その社会理論の製作者以外の社会的役割にあった人々の書いたものにも分析の手を広げるべきだ、とカミックは主張している。このような主張の下に書かれたのが、彼の1979年の「功利主義再訪」論文である。

16) 本稿における引用の表記方法について一言お断わりをしておきたい。最初に述べた通り、アレグザンダとカミックの見解の紹介と要約が本稿の大部分を占める。したがって、引用箇所をいちいちかきカッコではさんで、正確を期することは煩瑣になりすぎるのでそのような引用方法を避けた。代わりに、要約的な段落の末尾に、煩を厭わずその都度引用元を明示するようにした。ただし要約的な部分でありながら、多少なりとも前後の文脈の関係から原著者の用語法を若干変えて要約した箇所もある。なお、原著者の見解と筆者個人の見解は、それとわかるように区別して論述したつもりである。

また、アレグザンダもカミックも先行研究を多く引用して、自説を組み立てている箇所があるが、本稿では原則として、先行研究への注は省いて、それらに依拠して示されている彼らの見解だけを引用した。

17) チャーターの定義は、次の通り。「特定の歴史的状況下において、あるグループ・メンバー達がその特定の時点で目標としているものを、またその目標の達成に役立つところのものを、そのグループの一般的な状況と利害として表現する傾向——そういう傾向をもっているテキストのことをチャーターと呼ぶことにする」(Camic 1989: 47)。この定義の中で、カミックはとくに、客観的にみれば個別的でローカルな考え方を、一般的なものとして普遍化する傾向をもつことを、チャーターの一特徴として強調したいようである。

一般にアングロ-アメリカンの法では、ある団体を設立するとき、その明確な目標・運営の手続・資源・歴史的背景・将来の目的などを述べ、それによってその団体のアイデンティティを明らかにし、その団体の諸権利を宣言するために、起草された公式の文書を「団体(設立)のチャーター」と呼ぶということである(Camic 1989: 48)。

『英米法辞典』(1991)によると、charterには次のような意味がある。①当事者間でなされた合意や約束の証拠文書 ②不動産譲渡捺印証書 ③マグナ・カルタ ④国際連合憲章のような憲章 ⑤国王や議会が、会社、大学などを設立し、一定の行為能力を付与する証書。転じて、基本定款の意味で使われることもある ⑥州により設立された地方公共団体の権利・義務・責任の範囲を定めている設立法ないし基本文書。ほか。

訳語は、「憲章」(高城 1992: 90)、基本憲章、設立趣意書、定款などが考えられるが、ここでは「チャーター」とカタカナ書きにしておく。

18) アレグザンダの見解は、本稿第1章3節(4)注8に紹介した。

19) プリントンの論説については、高城(1992: 120-122)の記述も参照のこと。

20) カミックの1987年論文では、新古典派経済学と制度派経済学との論争が、社会的知的コンテクストの主要な内容としてとりあげられており、1989年論文とは若干の異同がある。

21) ヨーロッパだけではなくアメリカでも、パーソンズより以前に主意主義的な考え方があったことについては、油井清光(1995)を参照。「主意主義的行為理論への展開が、…アメリカ社会学を含めた欧米に共通した傾向であった…」(油井1995: 15)。

22) (パーソンズ独自の意味における)「経験主義」(empiricism)の当時の具体的なレファレントの一つは、社会学の中の経験的調査部門とみなされているようである(Camic 1989: 51)。1987年論文では、「経験主義」のレファレントの一つは「制度派経済学」であるとも指摘されている(Camic 1987: 429, n.8)。また、ホワイトヘッドの概念「具体者置き違いの誤謬」を引用しているときの具体的なレファレントの一つは、社会学の独立を認めないような新古典派経済学のことでありとされている(Camic 1987: 429)。

23) このような二分法についての言及は、溝部(1976: 8)を参照。

24) その他、この二分法で割り切ることがむずかしいものに、社会的に構成された動機・感情・習慣などがある(Camic 1989: 80)。

25) この「条件的要素」について、カミックによるとアレグザンダは、マルクス主義的な物的社会的条件のことという解釈を示しているという。しかし、カミックはこの解釈を否定している(Camic 1989: 42-44)。

26) パーソンズは、ある前線でそしてまた別の前線で彼のキャンペーンを展開し、そこで扱う具体的なトピックに対する自分のメッセージをたえず形作っていく。しかしその際、少なくとも表面上は互いに両立させるのがむずかしいような議論をしてしまうことがある、とカミックは指摘している(Camic 1989: 89)。このことも、『構造』という本の読みにくさの一因となっている。

27) パーソンズにみられるこのような傾向を、カミックは1991年の論文で、「コスモポリタン・ローカリズム」と呼んでいる。その意味は、「ある人が身近かに経験している知的なコンテクストから出現した問題やイシューに対して、一般的な意義を付与する態度」のことである(Camic 1991: lxvii)。カミックの1989年論文中に、この用語に近いものを探すと、「ローカルなもの普遍化」(a universalisation of the local)がある(Camic 1989: 84)。

28) アレグザンダは、彼独自の「混同」という視角から次のように述べている。「パーソンズの『混同』

を見てみると、三つの相対的に自律的な秩序の側面——理論前提的な秩序(非ランダム性という意味において)、モデルの秩序(機能主義者がいうシステム性という意味において)、経験的秩序(協力と調和という意味において)——が混乱して扱われている」(アレクサンダー 1996:97 注1)。アレグザンダの言う「混同」は、本文に引用しているカミックの視点とは異なるものである。

- 29) その一例は溝部 (1999:144-145 注20) を参照のこと。
- 30) 経済学との関係については、すでに進藤 (1985) の研究がある。「この理論とは『正統派』経済学……の批判的再構成に他ならない……。〔この〕延長線上に、……分析的抽象主義(最終的には『分析的リアリズム』)〔が定式化された〕」(進藤 1985:161)。
- 31) 「分析的リアリズム」については、溝部 (1999:146-147) を参照。また単位行為と分析的要素とを関連させたものは、溝部 (1976:3) を参照。分析的要素とは要するに、「変数」のことである。ただし、『構造』中で、単位行為の準拠枠と、古典力学の図式のアナロジーが用いられ、単位行為と質点に対応するといわれる。しかし、「質点」を変数と呼んでよいのかどうか、筆者には定かではない。
- 32) パーソンズが採用した方法論とウェーバーの方法論の異同については、カミックの1987年論文を参照のこと。そこでは、とくに、社会現象の無限の多様性、価値関係性、専門的社会学者と日常的行為者における社会的知識の獲得方法、という三つの問題が扱われている (Camic 1987:434-436)。
- 33) 『構造』中における「経験主義」の実際の使い方は、もっと広いものである。その多義的な使われ方については、溝部 (1999:148-149 注34) を参照のこと。また、『構造』における「実証主義」は、行為の規定要因を、究極的には遺伝と環境に還元する傾向のある行為論を指して使われることも多い。このことはカミックの視野の中に、もちろん入っているが、ここでは混同を避けるために、初期パーソンズのいう「実証主義」については、方法論レヴェルの「実証主義」と、行為論レヴェルの「実証主義」というふうに区別するのがよいと筆者は提案したい。本文中で引用しているカミックの使い方は、方法論レヴェルの「実証主義」である。
- 行為論レヴェルの「実証主義」と「理念主義」については、もともとはヤスパースの用語であるというカミックの指摘がある (Camic 1991:1)。
- 34) ニッチ (niche) という用語をカミックは使っていない。コリンズ (1994) の用語法の影響である。
- 35) 創発(的)特性とは、システムから切り離された部分ないし単位においては、観察されないが、システムを全体としてみると観察されるような特性のこと。
- 36) 三つの創発特性に究極目的(ないし究極価値)を加えると、四つのクラスターができてことになる。これは、AGIL図式の四つの次元と対応するようだ。(社会学の定義の問題は一応別にして、)このことを考慮すると、当時のパーソンズの視野にはこの四つのクラスターがまとまって入っていた、という可能性はやはり捨てきれない。
- なお、筆者はかつてAGIL図式に関する論文を書いたことがあるが、そのときはこの可能性に気づいていなかった (溝部 1979:19 注2)。
- アレグザンダは、インターチェンジ・モデルについて、それは機能主義の論理から派生しているのではなく、彼の一般的な認識論における、「多次元性」という視点から派生したものだ、と述べている (Alexander 1983:84-85)。『構造』における四つのクラスターのことを考えると、このアレグザンダの見解もなるほどと思える。ただし、アレグザンダは、中間的セクターの三つの創発特性を三つの個別社会科学に対応させるパーソンズのやり方に好意的な反応を示していないが(第1章2節注7を参照)。
- 37) 冷戦というコンテクスト、また、異議申し立て運動というコンテクストとパーソンズ社会学の関係については、溝部 (1999) を参照のこと。
- 38) 「社会的なもの」という言葉は、カミックのものだが、「社会学的なもの」とおなじ意味で使っているようだ。
- 39) ジンメルがこのテーゼからはずされている理由の一つとして、高城和義はジンメルの方法論が、記述的概念レヴェルにとどまっており、抽象的分析的概念に達していないことを指摘している (高城 2000:45-46)。

それに加えて、カミックの示唆を参考にすると、ジンメルが(経済学からではなく)哲学から社会学へと進んだ人であることも、影響しているかもしれない。

また、ジンメルがすでにシカゴ学派によって取り入れられていることへの対抗心もあったかもしれない。

40) これはカミックの社会学史の方法——「社会的知的コンテキスト分析」——に従うということ。つまり、その思想家の著作物だけをみるのではなくて、どういう状況下で、どういう問題にとりくんだのかを考慮する必要があるということ。本章1節参照。

41) 収斂テーゼを構成する顔ぶれは、『構造』の4人に定着するまでに、いくつかの版があったといわれている。たとえば、パーソンズの担当していた授業の1934-35年度には、パレート、ウェーバー、デュルケム、ジンメル、テンニース、ズナニエツキ、ホブハウスという構成になっていたという(Camic 1989: 59)。

また「収斂」という考え方のヒントは、彼の父エドワード、彼の学んだアマースト大学の学長マイクルジョン、ヤスパースなどから受けた教を彼なりに消化した成果から、また、彼自身の構想力から生まれた、とカミックは示唆している(Camic 1991: xlvii)。

42) たとえば、A.ヤングの行為図式を引用しながら、そこに「二分法」的考え方をすべりこませ、主意主義的行為者観あたりまで、「二分法」のうちの規範的諸要素をとくに際立たせておき、秩序問題を經由して、中間的セクター、究極目的(ないし究極価値)にまで辿りついたところで、共通価値統合という創発特性を提出して、社会学のニッチを確保する——このような問題の流麗なつなぎ方にこそ、初期パーソンズの真骨頂があるといえよう。

また、富永健一は、社会学理論を「行為理論」および「社会システム理論」の二大支柱によって組み立てる、という20世紀社会学の理論的構図をつくったことが、パーソンズの功績の大筋であると述べている(富永 2000: 2-3)。富永の指摘するその功績の最初の明確な形は、『構造』において表現されたことも忘れてはならないだろう。

「マイクロ-マクロ・リンク」問題について、『構造』の「手段-目的」連鎖としての行為システム、中間的セクターという構図を、カミックが高く評価していることは、すでに本章7節でふれた。

43) コスモポリタンという用語は、もともと地域性に関わるものと思われるが、カミックはこれを「普遍的な」という意味で用いているようである。そこから、ややわかりにくさが生じているように思う。

本文また次の注で検討しているように、分析的要素の抽象の問題、「具体者置き違いの誤謬」の問題、「経験主義」の問題、具象と抽象の問題、特殊と普遍の問題、「1次理論と2次理論」の問題など複数の問題と、カミックの「コスモポリタン・ローカリズム」は関係しているようにも見える。この点は今後の検討を待ちたい。

ここでは単純に、複数あるもののうち一つだけあるいは全体からある部分だけを取り出して、すべてをカバーあるいは代表していると主張する態度、かつ／あるいは、特殊なものを直ちに一般化する態度のこと、あるいは、ある特定の知的サークルの中だけで通用するような考え方を他のどこにいても通用する考えのように主張する傾向のこと、と理解しておこう。

44) あるいは、複数の行為図式を用意して、一つは「手段-目的」関係が明確な行為のための図式、他の図式は習慣的行為のための図式とする方法もあろう(この方向は、M.ウェーバーによる行為の類型論の分析的図式版ということになる)。

また、カミックの批判の内容は、「具体者置き違いの誤謬」を指摘しているとも受け取れる。つまり、理論の持つ抽象性を否定するという、「経験主義」——この用語はすでに指摘したように多義的な意味をもっている——の一つの意味に、パーソンズがはまり込んでいるとの指摘である。しかし、このあとの本文で述べるとおり、パーソンズは自分の理論の持つ抽象性を十分強調していた。

45) この説明はいかにも意地の悪い見方のようにきこえるかもしれない。しかし、筆者はそのような見方からこの説明を引用しているのではない。

社会学を確立するという大志、家族を抱えながら、自分たちの将来を切り拓くという希望——これらは

若い人間が抱いて当然の夢である、という見方も可能であろう。

- 46) パーソنزの言葉を引用しているが、引用注が明示されていないので、引用元は不明である。
- 47) パーソنزの社会学への道りについては、高城(1992：第一章～第四章)が、パーソنزの家族環境から説き起こして、詳しく扱っている。
- 48) カミックの説を知る前は、筆者の頭の中で、『構造』と時代との関わりが明確にならなくて、これも不思議に思っていたことの一つだった。カミックの説によれば、アカデミック・シーンというごく狭いコンテキストが、初期パーソنزと時代が切り結んだ交点の一つというわけだ。このような発想とそれをフォローする研究は、われわれのように外国にいて主にパーソنزの著作を読むことを研究手段とする者には不可能だろう。もっとも、読後に不思議に思うことが多く残るといふことも、読む側にとっては一冊の本の魅力のうちであるともいえるが。
- 49) 1991年論文のカミックは、1989年論文に比べて、この「輻輳説」に近づいているようだ。
- 50) くり返しになるが、カミックの場合は、当時のパーソنزが置かれていた彼の身近な状況に視点をあわせている。それに対して、アレグザンダは、パーソنزと古典的巨匠や方法論の哲学的伝統、宗教的伝統との対話を重視し、パーソنزの学問的活動の平面を、歴史をも含むような広大な次元に設定している。
- 51) 富永健一は、「ヴェーバー研究がヴェーバー生誕100年前後から本格化したように、パーソنز研究の本格化はこれから開始されることが期待される」と述べている(森岡清美ほか 1993：1181)。  
ちなみにパーソنز生誕100年は、2002年である。
- 52) 本論では、マーク・グールド(M. Gould)とカミックの論争にふれることができなかった。詳しくは、文献表のグールドの二論文を参照していただきたい。

## 引用参考文献

- Alexander, J.C. 1983, *The Modern Reconstruction of Classical Thought : Talcott Parsons, Theoretical Logic in Sociology*, vol.4, London, Melbourne and Henley : Routledge & Kegan Paul.
- . 1990, “Commentary : Structure, Value, Action,” *American Sociological Review*, 55(3) : 339-345.
- アレキサンダー、鈴木健之編訳、1996、『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣。
- . B.Giesen, R.Muench and N.J.Smelser eds., 1987, *The Micro-Macro Link*, Berkeley and Los Angeles : University of California Press. (=1998, 石井・内田・木戸・圓岡・間淵・若狭共訳『ミクロ-マクロ・リンクの社会理論』新泉社.)
- Ben-David, Joseph and Randall Collins. 1966, “Social Factors in the Origins of a New Science,” *American Sociological Review*, 31 : 451-465.
- Camic, C. 1979, “The Utilitarians Revisited,” *American Journal of Sociology*, 85(3) : 510-550.
- . 1981, “On the Methodology of the History of Sociology : A Reply to Jones,” *American Journal of Sociology*, 86(5) : 1133-1138.
- . 1986, “The Matter of Habit,” *American Journal of Sociology*, 91(5) : 1039-1187.
- . 1987, “The Making of a Method : Historical Reinterpretation of the Early Parsons,” *American Sociological Review*, 52 (August) : 421-439.
- . 1989, “Structure after 50 Years : The Anatomy of a Charter,” *American Journal of Sociology*, 95(1) : 38-107.
- . 1990, “An Historical Prologue,” *American Sociological Review*, 55(3) : 313-319.
- . 1991, “Introduction : Talcott Parsons before The Structure of Action,” Talcott Parsons, *The Early Essays*, The University of Chicago Press, ix-lxix.
- . 1992, “Reputation and predecessor selection : Parsons and the Institutionalists,” *American*

- Sociological Review*, 57(4) : 421-445.
- Collins, Randall. 1994, *Four Sociological Traditions*, New York : Oxford University Press. (=1997, 友枝敏雄ほか訳『ランドル・コリンズが語る 社会学の歴史』有斐閣.)
- . 1987, "Interaction Ritual Chains, Power and Property : The Micro-Macro Connection as an Empirically Based Theoretical Problem," J.C. Alexander, B.Giesen, R.Muench and N.J.Smelser eds., *The Micro-Macro Link*, Berkeley and Los Angeles : University of California Press. (=1988, 内田健訳「相互行為儀礼の連鎖・権力・所有権」石井・内田・木戸・圓岡・間淵・若狭共訳『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』新泉社, 119-138.)
- Gould, Mark. 1989, "Voluntarism versus Utilitarianism : Critique of Camic's History of Ideas," *Theory, Culture & Society*, 6(4) : 637-654.
- . 1991, "The Structure of Social Action : At Least Sixty Years Ahead of Its Time," R. Robertson and B.S.Turner eds., *Talcott Parsons : Theorist of Modernity*, Sage Publications. (=1995, 清野正義訳「社会的行為の構造」中・清野・進藤共訳『近代性の理論』恒星社厚生閣, 112-141.)
- Gouldner, A. W. 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York : Basic Books. (=1974-75, 岡田・田中・矢沢・矢沢・栗原・瀬田・杉山・山口共訳『社会学の再生を求めて』1・2・3 新曜社.)
- Jones, Robert A. 1981, On Camic's Antipresentist Methodology, *American Journal of Sociology*, 86(5) : 1133-1138.
- . 1983, "The New History of Sociology," *Annual Review of Sociology*, 9 : 447-469.
- 厚東洋輔. 2000, 「『社会』概念のアイデンティティとキャパシティ」『ソシオロジ』45(1) : 46-49.
- Martin U. Martel, 1971, "Academentia Praecox : The Aims, Merits, and Scope of Parsons' Multisystematic Language Rebellion (1958-1968)," Herman Turk and Richard L.Simpson eds., *Institutions and Social Exchange*, Indianapolis, 174-210.
- 溝部明男. 1976, 「初期パーソンズの諸問題」『ソシオロジ』21(3) : 1-24.
- . 1979, 「パーソンズのAGIL図式」『社会学評論』30(2) : 2-24.
- . 1986, 「パーソンズにおける合議制的アソシエーションと専門職をめぐって」中久郎編『機能主義の社会理論』世界思想社, 235-250.
- . 1999, 「初期パーソンズにおける『制度』あるいは『秩序』概念の批判的検討」中久郎編『社会学論集 接続と変容』ナカニシヤ出版.
- 森岡・塩原・本間編集代表. 1993, 『新社会学事典』有斐閣.
- 中野秀一郎. 1999, 『タルコット・パーソンズ』東信堂.
- Parsons, Talcott. 1934, "Some Reflections on 'The Nature of Significance of Economics,'" *Quarterly Journal of Economics*, 48:511-45.
- . 1935, "The Place of Ultimate Values in Sociological Theory", *International Journal of Ethics*, 45 : 282-316.
- . 1937, *The Structure of Social Action*, I/II, New York : The Free Press. (=1974-1989, 稻上・厚東・溝部共訳『社会的行為の構造』1~5, 木鐸社.)
- . 1945, "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology," Reprinted in : Parsons, 1954, *Essays in Sociological Theory*, second ed., New York, The Free Press.
- . 1951, *The Social System*, New York, The Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- . 1959, "An Approach to Psychological Theory in Terms of the Theory of Action," Sigmund Koch ed., *Psychology : A Study of a Science*, 3, New York : McGraw-Hill, 612-711.
- . 1977, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, New York : The Free Press. (=1992, 田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房.)
- 盛山和夫. 1995, 『制度論の構図』創文社.

- 進藤雄三. 1985, 「主意主義的行為理論の生成過程——パーソンズの初期論文を中心に」『ソシオロジ』30(1):145-168.
- 鈴木健之. 1997, 『社会学者のアメリカ』恒星社厚生閣.
- 高城和義. 1992, 『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店.
- . 2000, 「パーソンズのジメル論——最近公刊された二つの草稿を中心として」『思想』910:30-55.
- 田中英夫編集代表. 1991, 『英米法辞典』東京大学出版会.
- 富永健一. 1995, 『行為と社会システムの理論』東京大学出版会.
- . 2000, 「思想の言葉 二〇世紀社会学におけるパーソンズの位置」『思想』910:1-3.
- 友枝敏雄. 1996, 「社会体系と秩序問題」北川隆吉・宮島喬編『20世紀社会学理論の検証』有信堂, 17-41.
- 油井清光. 1995, 『主意主義的行為理論』恒星社厚生閣.

\*この文献表は必ずしも網羅的には作製されていない。特に、日本語の文献は時間的制約により、限られたものにしか言及できなかった。

〔追記〕本稿脱稿後に、東京の「パーソンズ研究会」（2000年12月22日於法政大学多摩キャンパス）で本稿の一部を報告させて頂く機会があり、出席者の方々から多くの貴重なご意見を頂戴した。そのうちの一つは次のようなものであった。カミックの社会学史は、「利害」を重視する歴史研究の一典型である。それはそれとして、しかし我々にとって重要なことは、パーソンズがどういう学問的営為を引き受けたか、どのような内容をもつ学問を確立しようとしたか、ということではないか。その点をカミックがどう考えているかが問題である。

また、カミックほかに関連して、次のような資料および文献をご教示いただいた。いずれも本稿では参照していないものなので、初稿段階で追加させていただく。研究会の皆さんに感謝したい。

- ・ パーソンズとF.ナイトの往復書簡が、ハーヴァード大学パーソンズ・アルヒーヴズに所蔵されている。
- ・ 1940年に、パーソンズとナイトの間で論争が行われている（*Canadian Journal of Economics and Political Science*, vol.6）。
- ・ Alexander. 1998, *Neofunctionalism and After*の中に、カミックに対する批判が書かれている（とくに第6章）。
- ・ *Annual Review of Sociology* (1985) に、D.Sciulli and D.Gersteinの論文がある。この論文は、80年代になされた、Muench, Bershady, Habermas, Alexanderらのパーソンズ研究を概観している。また、*Sociological Theory* (1996) に、カミックとアレグザンダの論争が載っている。
- ・ 大黒正伸氏が1996年以来『ソシオロジカ』に書きついでおられる論文に、Camic (1979, 1991, 1992)に関する言及がある。